

第四百三十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ拘留狀若シハ收監狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲ス事ヲ得

第四百四十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サス

食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

第四百四十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報知ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百四十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヲナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書証據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸

般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百四十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百四十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ  
書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百四十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢査ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第五百十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス

○第六類○治罪法○治罪法

第五百一十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ  
豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ  
若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ書記ハ本條ノ式ヲ  
履行シタルコトヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

第五百一十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立ケル時ハ更  
ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ  
署名捺印ス可シ

第五百一十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第五百一十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト人違ナキコト其他事實ヲ發  
見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被  
告人証人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得

第五百一十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ  
錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第五百一十六條 被告人又ハ對質人聲ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ  
書面ヲ以テ答ヘシム若シ嚙者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ  
被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第五百一十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第五百一十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪

第五節 檢證及ヒ物件差押

第五百一十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪  
ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第五百二十條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナ  
キコトヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

第六十一條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ摸  
樣ニ因リ被告人ノ人違ナキコト又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト思料  
シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ  
又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第六十二條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終  
ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置ク事ヲ得

第六十三條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏

第六類 ○治罪法 ○治罪法

匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スル事ヲ得  
被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其  
在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第三百三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十三條 被告人ハ臨時家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立  
會ハシムルヲ得

若シ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ  
立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判  
事ハ其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラス

第三百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第三百六十條ノ規則ニ從  
ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第三百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ  
問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第三百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要  
ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第三百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許  
ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得

若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置ス  
ルヲ得

第三百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ  
事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

第三百六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信  
鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル者ヨリ

發シ若シハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スル  
ヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第一百七條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名  
シタル者ヲ呼出ス可シ

原告証人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又最モ事實ヲ

○第六類○治罪法○治罪法

知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ証人トシテ之ヲ呼出スヲ得

第七十一條 証人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ証人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ証人裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ証人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニハ証人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且拘引スルヲ

アル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ廿四時ノ猶豫アル可シ

第七十四條 証人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 証人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キヲ認可シ又ハ職務上己ムヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外証人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其証人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ拘引狀ヲ發スルヲ得但其費用ハ証人ヲシテ之ヲ擔當セシム若シ証人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且拘引狀ヲ發スルヲアル可シ

第七十七條 豫審判事ハ証人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケタルヲ其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルヲ又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリ

○第六類○治罪法○治罪法

テ出廷スル能ハサリシトテ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ  
言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出  
ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヲ證明スヘシ

第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職  
業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス  
可キヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ証人宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印ス  
ルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置シ可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルヲ許サス但事實參考ノ  
爲メ其陳述ヲ聽クヲ得

- 一 民事原告人
- 二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
- 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者
- 四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未滿ノ幼者

二 知覺精神ノ不充ナル者

三 瘖啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該  
ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證據充分ナラサルニ  
因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第八十三條 証人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審  
判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其言  
渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

醫師藥商穩婆又ハ代言人辨護人代書人公証人若クハ神官僧侶其身分職  
業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス  
第八十四條 証人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事  
實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ証人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セ  
シムルヲ得

第六類 ○治罪法 ○治罪法

第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリト  
スル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得  
若シ証人同行スルヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ  
言渡ス可シ

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ニ付テモ亦之ヲ適用ス  
第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在  
ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ其調書ニ  
ハ證人宣告ヲ爲シタルコト又ハ爲サ、ルノ事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲  
メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カサシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減セシメテ請求スルヲ得書記其請求アリタルコ  
ト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印  
ス可シ若シ證人署名捺印スル事能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條 証人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得  
若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償  
金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲  
メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者  
一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出  
狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルコト及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ  
言渡ス可キヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ但勾  
引狀ヲ發スルヲ得ス

第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第百九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從フ  
書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルコトヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書  
ヲ添置シ得シ

第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セズ又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫  
審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但

其言渡ヲ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第九十五條 第八十一條 第八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルコトヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ捺印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ作りタル譯本ヲ添置ク可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與可シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百壹條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知りタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二百貳條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢証調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ  
第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルコトヲ知りタル時ハ豫審判事ヲ待ツコトナシ其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

第六類 ○治罪法 ○治罪法

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルコトナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添へ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但令狀ヲ發スルコトヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添へ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添へ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ廿四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル拘留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルコトヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スコトヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作りタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置ス可シ

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ拘留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラヌ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スコトヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中拘留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應ジ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ廿四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシムヘシ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載スヘシ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證金ヲ差出スコトヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル

○第六類○治罪法○治罪法

下五百八十九



時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條 豫審判事保証金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スルヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保証金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所

ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金

ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若シハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トテ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要

スルヲナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

檢事ハ訴訟書類ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ拘留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令

狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一 犯罪ノ証憑充分ナラサル時

二 被告事件罪ト爲ラサル時

三 公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

○第六類 ○治罪法 ○治罪法

四確定裁判ヲ經タル時

五大赦アリタル時

六法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲ス可キ得ス

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ

移スノ言渡ヲ爲シ且被告人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人拘留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲ス可キ得

若シ被告人未ダ拘留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スヘシ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消スヘシ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置スベキヲ記載スヘシ

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付スヘシ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ拘留スベキ時ハ其理由ヲ明示スベシ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヲ公訴受理スベカラサルヲ及ヒ其理由又犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示スベシ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質摸樣証憑ノ充分ナルヲ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲ス可キ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シタル

○第六類○治罪法○治罪法

下五百九十三

時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ拘留ヲ受クルニ非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告人ノ財産ヲ差押フ可キヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡畧ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サ、ル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意書ヲ差出スベシ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出スヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルニ付キ

檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事二名以上ニテ趣意

書答辨書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可シ

會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言渡アリタル後上告ヲ爲スヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ豫審

終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルヲ得

一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナル時

二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時

三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ親屬

ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時

第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ爲ス

ニハ趣意書ニ通テ書記局ニ差出スベシ

○第六類○治罪法○治罪法

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリニ  
十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトハ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一  
通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百二十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故  
障ヲ爲スコトヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲ス  
ベシ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シ  
タルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言  
渡ヲ爲スコトヲ得ス

又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコトヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告  
ヲ爲スコトヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得  
ス

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル原由アルコト  
認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可  
シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁  
判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ

其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事  
ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スコトヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局  
ニ申立テ之ヲ忌避スルコトヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ  
得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツル  
コトヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得  
民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ  
故障ヲ爲スコトヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得  
輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄

○第六類○治罪法○治罪法

書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨリ一十四時内ニ其中立ヲ認可シ又ハ棄却スルコトヲ趣意書ノ紙尾ニ記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ

第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨリ故障ヲ爲スコトヲ得

會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辨明書ニ依リ判決ヲ爲スベシ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其申立ヲ棄却シタルニ付キ故障アリタル時ト雖モ豫審ノ手續ヲ繼續ス可シ但終結ノ言渡ヲ爲スコトヲ得

又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審ノ手續ヲ停止スルコトヲ得

第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ上告ヲ爲スコトヲ得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得

第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル理由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審ヲ爲サシム可シ

其判事ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スコトヲ得

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會議局ニ申立テ之ヲ忌避スルコトヲ得

第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ申立ツルコトヲ得

檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可シ

第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得

被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スコトヲ得  
輕罪裁判所又ハ遊警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄

○第六類○治罪法○治罪法

逆越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲ス可  
ヲ得ス

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタルヨ  
リ之ヲ起算ス

第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書ヲ書  
記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ

故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出ス  
可シ得

第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時ニテ  
モ附帶ノ故障ヲ爲ス可シ得

附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手  
人ハ三日内ニ答辨書ヲ差出ス可シ得

第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ其判  
決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ拘留シ又ハ保釋責付ヲ取消スノ言  
渡ハ其執行ヲ停止セス

第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辨書其他訴訟書類ヲ會議局ニ差出

ス可シ

第二百五十二條 會議局ニ於テハ第二百三十六條ノ規則ニ從ヒ故障ノ判  
決ヲ爲ス可シ

豫審判事ノ言渡ヲ認可シタル時ハ其旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾分ヲ  
取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡ヲ爲ス可シ

又被告人ヲ保釋責付シ又ハ拘留スルノ言渡ヲ爲ス可シ得

第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ更ニ  
豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其報告書ヲ  
差出サシム

第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄逆越權又ハ公訴受理ス  
可カラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡ヲ取消ス可  
シ得

第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル者ア  
ルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルコトヲ發見シタル時ハ檢事  
ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ其報告書ヲ差  
出サシム可シ  
檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ

○第六類○治罪法○治罪法

會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス可シ

第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢事民

事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ爲ス

コヲ得

第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴スル

ヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從ヒ更ニ言

渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フコトナル可シ

第二百五十九條 第三百一十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審ノ上

訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡書ニ

一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送達ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ

檢事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行

ヲ爲ス可シ

第二百六十一條 豫審ニ於テ被告人免許ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル

時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可  
シ但新ナル証憑アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル証憑アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起

訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

### 第四編 公判

#### 第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ

公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決拘留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更ス

ルコトヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順

序ヲ變更スルコトヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辨論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス

否ラサル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐

アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ

辨論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

### ○第六類の治罪法 ○治罪法

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置シコアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ出廷シテ辨論スルコトヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辨論ノ爲メ辨護人ヲ用フルコトヲ得

辨護人ハ裁判所々屬ノ代官中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タル時ハ代官ニ非サル者ト雖モ辨護人ト爲スコトヲ得

第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧嘩ヲ爲シ辨論ヲ妨礙スル時ハ裁判長ヨリ再度告戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ拘留スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辨論及ヒ裁判言渡ヲ爲スコトヲ得若シ辨論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルコト能ハサル時ハ痊癒ニ至ルマテ辨論ヲ停止ス

辨論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辨論ヲ爲スコシ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手

續テ爲スコシ但五日間辨論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辨論ヲ爲スコシ若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辨論ヲ終リタル時ハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナシ裁判言渡ヲ爲スコシ

第二百六十九條

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲スコカラス

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲スコキノ告知書ヲ親屬若クハ戶長ニ送達ス可シ

第二百七十條

闕席シタル被告人ニ付テハ辨護人ヲ用フルコトヲ許サス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルコト能ハサルノ事由ヲ證明スルコトヲ得裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判ヲ延期スルコトヲ得

第二百七十一條

被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲スコシ

第二百七十二條

裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置ヲ爲

○第六類○治罪法○治罪法



ス可シ

稱讚誹謗其他辨論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラス裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辨論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラズ

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止ス

ルヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ申立ヲ爲スヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百八十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辨論ヲ停止シタル時ハ新ニ辨論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ効ヲ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書説明ノ爲メ之ヲ呼出スヲ得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル証人ハ更ニ之ヲ呼出スヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ、ル時証人呼出ヲ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條 第百七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ適用ス

第二百八十八條 証人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辨論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條 証人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ  
一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヲ得

○第六類○治罪法○治罪法

訴訟關係人ハ辨論ニ必用ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ証人ヲ訊問ス可キヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 証人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ拘引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其証人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡ス可キヲ得

第二百九十三條 証人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サズ

一 違警罪事件ニ付テハ五拾錢以上一圓九拾五錢以下ノ科料

二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル証人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラズ

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達スヘシ其言

渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ言渡ヲ取消ス

可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其閉廳シタル裁判所ニ其申立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 証人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲ス可キヲ得

檢察官自ラ其請求ヲ爲サ、ル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述スヘシ

第二百九十六條 証人再度ノ呼出ヲ受ケ仍ホ出廷セサル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡ス

可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ得但延期マ

タル時ハ其証人ニ對シ拘引狀ヲ發ス可シ

第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ証人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ

第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第二百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從テ

○第六類○治罪法○治罪法

第二百九十九條 被告人數名アル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ムヘシ  
裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルヲ得

第三百條 證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事擔當人ハ順次發言ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ得ス

檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辨論ヲ爲スヲ得但辨論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條 辨論中公判ノ手續ニ附キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決スヘシ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス  
第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヲ得  
又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヲ得

若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辨論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ証憑ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證憑ナキヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲スヘシ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ  
免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ  
私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ

○第六類○治罪法○治罪法

第二百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トナ問ハス沒收ニ係ラサル  
 差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ  
 第二百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル時ハ  
 其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス  
 第二百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ  
 就クニ非サレハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス  
 第二百十一條 拘留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其申  
 立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ  
 第二百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ  
 經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ証明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ  
 失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期  
 限内ニ其證據ヲ申立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ  
 第二百十三條 書記ハ速ニ前條ノ申立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ  
 三日内ニ答辨書ヲ差出スコトヲ得  
 判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴  
 ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ  
 上訴ヲ受理スヘキ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係人ニ

通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ上訴ヲ受理ス可カ  
 ラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ  
 爲サシム可シ  
 第二百十四條 裁判言渡ハ辨論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ  
 又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ  
 裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ裁判  
 言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ于預シタル檢察官  
 ノ氏名ヲ記載ス可シ  
 第二百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書  
 ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内  
 ニ之ヲ下付ス可シ  
 第二百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡  
 ヲ受ケタル者ニ前條ノ言渡及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得  
 可キコト及ヒ其期限ヲ告知シ又ハ缺席裁判ニ因リ刑ノ言渡シアリタル時  
 ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ言渡書記載ス可シ  
 若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期  
 限ノ經過ヲ停止ス

○第六類○治罪法○治罪法

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ事件其  
他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由  
二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三 証人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サル時ハ其  
事由

四 原被ノ証據物件

五 辨論中異議ノ申立アリタルヲ後日ナ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タ  
ルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判  
決

六 辨論順序及ヒ被告人ナシテ最終ニ發言セシメタル事

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタ  
ル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ  
辨論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ  
辨論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ  
書記ニ於テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及

ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ  
其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保  
存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認  
印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ於テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀

二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日  
時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若  
シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サ、ル時ハ  
公廷ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辨護ノ爲メ二日ノ猶豫  
ヲ求ムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可

○第六類○治罪法○治罪法

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛  
ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會  
ヲ要セスシテ檢証處分ヲ爲ス可シ得

第三百二十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ  
猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シ  
タル時ハ裁判所ニ於テ証人トシテ其陳述ヲ聽ク可シ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ  
其呼立ニ應ゼザル者ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可  
シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所  
出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ檢察官ハ  
被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊  
問ス可シ

若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス  
可シ

第三百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ証憑ヲ差出スニ及ハス  
但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ  
差出サシムルヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他証憑アル時ハ之ヲ差出ス可  
シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷セザ  
ル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ依リ  
闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ  
闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリタル  
ヨリ三日内ニ其中立ヲ書記局ニ差出ス可シ

○第六類○治罪法○治罪法

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否ヲ判  
決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障アリタルコ  
及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知スル爲メ呼出  
狀ヲ送達スヘシ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ  
又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ  
第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十六條  
ヨリ第三百卅條迄ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ其裁判ニ闕席シタ  
ル者ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡  
ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ  
刑ノ言渡ヲ爲ス

第三百三十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其  
事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ拘留狀ヲ發スルコ  
トヲ得

第三百三十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕

罪裁判所ニ控訴スルコトヲ得

一被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁  
判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原因アラサル時ト雖モ管轄  
違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百三十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ其申立書  
ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又闕  
席裁判所ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリ  
タルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ  
第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁  
判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ  
檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人  
ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

○第六類○治罪法○治罪法



呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫アル可シ  
證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出  
ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ  
控訴ヲ爲スコトヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルコトヲ得  
第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メザル規  
則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル証人又  
ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スコトヲ得ス

第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スル  
ノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ被告人ノミ控訴  
ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ被告人ノミ控訴ヲ爲シ  
シル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スコトヲ得ス  
私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ闕席裁判ニ付テモ  
亦之ヲ適用ス

第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判

言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第三章 輕罪公判

第三百四十七條 輕罪裁判ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

- 一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
- 二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ  
移スノ言渡

第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則  
ニ從フ

第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシ  
ムルコトヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルコトヲ得

第三百五十條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫  
ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦  
之ヲ適用ス

第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出  
生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ

○第六類○治罪法○治罪法

民事原告人ハ被告事件ヲ證明ス可シ

調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ朗讀セシメ次ニ原被証人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辨解ヲ爲サシム可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述スヘシ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辨ヲ爲ス可シ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ規則

ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲ス可シ得ヘキ被告人其呼出ノ日時ニ出廷セサル時

ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百三十一條ヨリ第三百三十四條

マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ左

ノ場合ヲ除ク外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲ス可シ得

一被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ證アル時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヲ知リタルヨリ三日内ニ故障ヲ爲ス可シ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ檢察

官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ呼出シ鑑

定人ヲ命シ若クハ臨檢ヲ爲ス可シ得但是等ノ處分ヲ爲スニ於テハ第三

編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件ニ付

キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ言渡

ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ被告人拘留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且被告

人拘留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ

經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人拘留ヲ受ケ

サル時ハ拘引狀ヲ發ス可シ

訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルコトナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ

檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

又第二百五十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得

第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケザル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルコトヲ得

一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但逆警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時

二 被告人ハ逆警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時

三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲スコトヲ得

闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ於テハ五日

日前ニ之ヲ爲ス可シ

第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被告人

勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス可シ

第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

○第六類○治罪法○治罪法

第三百六十九條 輕罪裁判所檢察官ノ控訴又ハ裁判長ノ附帶ノ控訴アリタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可シ

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ裁判確定シタル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢察長公訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢察長公訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢察官ニテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様

二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

三 豫審ニ於テ集取シタル原被告ノ證據

四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラズ

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ

作リタル上ニテ各別ニ辨論ヲ爲ス可キ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得

又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辨論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クモ五日日前ニ公訴狀ノ謄本

ヲ被告人ニ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀

○第六類 ○治罪法 ○治罪法

ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告

人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代

言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代言人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代言人一名ヲシテ被告人數

名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯護ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可キ正

當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ

規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三

日間辨論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作り辨

護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辨論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辨論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ

記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辨論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカ

ル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ背キタルヲアリト雖

モ辨論ニ取掛ル前ニ非サレハ被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲スヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分アリタル後被告人ト接

見スルヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫スルヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ言渡アリタルヨリ裁

判言渡アルマテ被告人ト接見スルヲ得ス但被告人現ニ拘留ヲ受クル

地ノ裁判所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人ノ

氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ同上ノ期限内ニ書記

ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事ニ付キ呼出シタル証人ノ氏名目錄ハ之ヲ

民事原告人ニ送致ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ

事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキヲ

申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第三百八十五條 証人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫

○第六類○治罪法○治罪法

ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開庭ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ  
面前ニテ開庭ス可キヲ陳述ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪  
裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問  
及ヒ辯論ニ取掛ル可シ

裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ若シ  
其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ  
相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ  
其呼立ニ應シタル証人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ呼入  
ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルニ付キ注意  
シテ聽ク可キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊問ス  
可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントスル時  
ハ其事由ヲ辨明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ從ヒ  
其證憑ニ付キ辨解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可  
キヲ被告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告証人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意見ア  
リヤ否ヲ問フ可シ

第三百九十四條 証人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ

但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルヲ得又證人  
ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ証人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ  
充分ナル陳述ヲ爲スヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告  
人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムル  
ヲ得

○第六類○治罪法○治罪法

裁判長ハ証人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百九條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辨論ノ終結シタルコトヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辨論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルコトヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシム可シ

第三百五十七條 第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百九十八條 辨論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辨護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルコトヲ辨論スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辨論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辨護人及ヒ民事擔當人ハ答辨ヲ爲スコトヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルコトヲ得但閉廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且証憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲スヘシ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ証憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辨論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百四條 闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀シシメ又原被証人ノ陳述ヲ聽ク可シ  
檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ附キ意見ヲ陳述ス可シ

民事擔當人ハ答辯スルヲ得

第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ

第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ上告ヲ爲スヲ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲スヘシ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則

ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時

四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得ヘキ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

○第六類○治罪法○治罪法



八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聴ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辨論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ理由ノ齟齬アル時  
十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルコト又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル原由ニ付キ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ拘留保釋責

附釋放及ヒ赦免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辨書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辨書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辨書ハ二通ヲ作

リ一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ  
私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辨書ニ付テモ亦同シ

○第六類○治罪法○治罪法

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代理人ヲ差出ス可キヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ

代理人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所属ノ代理人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラズ

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出ス可テハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣旨ヲ擴張ス可キ辨明書ヲ差出ス可キ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辨明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書

ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代理人ニ報告ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢察長及ヒ代理人ハ各其趣意ヲ辨明ス

私訴ノ上告ニ付テハ檢察長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代理人ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スル

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所

ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラズ

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若シハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルトニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スヲナシ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

○第六類○治罪法○治罪法

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク止ク其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス 大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其

裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スコトヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルコトヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時

一訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時

一同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辨書ヲ差出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲ズ可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨリ三日間又ハ哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

○第六類○治罪法○治罪法

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非シテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

三犯罪アル以前ニ作リタル公正ノ證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時

四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事長

三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證書類ニ意見ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ヲ添ヘ之ヲ大審院檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長目ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ關キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院

ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナ  
ク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條ノ場  
合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ  
揭示公告ス可シ

第二章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トト問ハス管轄ニ非サルノ言  
渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ變事ニ因リ訴  
訟事件ヲ管理スルコト能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄  
ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得

大審院檢事長司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコトヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ  
訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任  
判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決  
シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル  
事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ  
其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大  
審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽シ  
ナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ  
ヲ維持スルコト能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ  
公平裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官  
其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ  
申立ナクシテ本案ニ付辨論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スコトヲ得

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ  
通テ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
書記ハ速ニ一通テ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内

○第六類○治罪法○治罪法

ニ答辨書ヲ差出スヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破毀又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ闕席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送達ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ  
但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ附キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ  
第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ  
復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ  
一 裁判言渡書ノ謄本  
二 主刑ノ満期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルヲ証明スル書類  
三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セシタルノ證書  
四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書  
五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ依リ復權ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出

○第六類○治罪法○治罪法  
下六百四十九

シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ  
前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ  
非サレハ更ニ其願ヲ爲ス可シ得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁  
判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送  
致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其裁判所ニ於テ  
ハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監  
獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見  
書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添へ上奏ス可シ  
第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立

ヲ爲ス可シ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セズ

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲  
シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル  
裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條  
ノ規則ニ從フ

○第二款

治罪法中當分實  
施セサル條件

明治十四年九月  
第四十六号布告

書類送達ニ附治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀  
候事

治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪  
ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑托アリタル時ハ其被告人逃  
捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内二名ト  
相定候事

○第六類○治罪法○治罪法中當分實施セサル條件

下六百五十一



治罪法第百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料ス可キ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルヲ得

治罪法第百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又ハ旅籠屋貸座敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜索致シ苦シカラス

治罪法第百六十八條第百七十三條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヲ得

治罪法第百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シ苦シカラス

○第三款 被告人責付手續

明治十四年九月  
第四十七號布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ証書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責附中被告人ヲ呼出ストキハ出廷ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意

見テ聽キ責附ヲ取消スヘシ

○第四款 保釋責付中 被告人取締法

明治十六年十一月  
司法省丙第八號達

保釋責附中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ附左ノ通各裁判所ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

丁第三十一號

保釋責附ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付保釋責附ヲ爲ス際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨クナシ

第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ届置シ可キコトハ言ヲ俟ズ其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルヲ得ス

若シ己ムヲ得サル事由アルキハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滞在スルキハ滞在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アラサルキハ其住所ノ地ノ戸長ニ届置ク可シ

第三條 代言人辨護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルヲ得ス

○第六類 ○治罪法 ○保釋責付中被告人取締法

第四條 治罪法第二百一十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其責附テ受ケタル者モ亦同シ

○第五款 刑事控訴ニ關スル條件 明治十四年十二月第七十四号布告

治罪法中刑事ノ控訴ニ關スル條件ハ當分ノ内實施セス

○第六款 違警罪審判便宜取計方 明治十四年十月第四十四号布告

違警罪ノ審判ニ關スル一切ノ手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖モ實際己ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス此旨布告候事

○第七款 違警罪裁判方 明治十四年十二月第八十号布告

本年九月第四十八號布告左ノ通改正ス

違警罪ノ儀ハ本年第三十六號布告ニ據リ明治十五年一月一日ヨリ治安

裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分ノ内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ

○第八款 警務部檢事ノ職務代理 明治十四年十二月第七十一号布告

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

○第九款 札幌根室始審裁判所治罪手續 明治十五年六月第三十号布告

札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ内治罪ノ手續便宜取計且重罪犯ハ之ヲ審訊シ證憑擬律按ヲ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スベシ

○第十款 被告人訊問時限 明治十五年十一月第五十三号布告

治罪法第二百六條第二百七條中二十四時内ト有之處己ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内五日以内ニ於テスルコトヲ得

○第六類○治罪法○違警罪裁判方○被告人訊問時限 下六百五十五

○第十一款

豫審ヲ要セサル  
輕罪裁判法

明治十四年十月  
第五十四号布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫  
審ヲ要セスト見込ム者ニ限リ始審裁判所々在ノ地ヲ除ク外治安裁判所  
ニ於テ輕罪裁判所ニ開キ其裁判ヲ爲スヲ得ベシ此旨布告候事  
但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テ  
ハ上訴ヲ許サス

○第十二款

陪席補充判事  
指定方

明治十四年十月  
第五十五号布告

治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁  
判所長又ハ院長ノ臨時指定スル處ニ任シ候條此旨布告候事

○第十三款

小笠原島裁判  
事務權限

明治十四年十月  
第五十六号布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所(即チ違警罪裁判所)  
始審裁判所(即チ輕罪裁判所)ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及重罪  
裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此

旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○第十四款 被告人訊問方

明治十四年十月  
第五十九号

治罪法中豫審判事拘引狀ヲ發シ拘引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊  
問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置  
クヘシ此旨布告候事

○第十五款

輕罪裁判開廳ノ事  
明治十四年十二月  
第七十七号布告

本年十月五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサルモノニ限リ治安裁判  
所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ得ヘキ旨布告候處當分ノ内豐岡相川洲本田  
邊脇田高山西郷平戸福江巖原天草大島大曲八戸ノ各治安裁判所ニ於テハ  
輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スルコトヲ得

但本文ノ場合ニ於テ訟庭内治罪ノ手續ハ本年五十四號布告但書ノ通  
ルヘシ

○第十六款

重罪裁判所區畫  
明治十六年九月  
第三十二号布告

○第六類○治罪法○被告人訊問方○重罪裁判所區畫

下六百五十七

明治十四年十二月第七十八號布告ヲ廢シ自今重罪裁判所ノ管轄ハ各始審裁判所管内ヲ以テ區劃ト定メ各其地名ヲ冒シ其重罪裁判所ト名稱ス但沖繩縣札幌縣根室縣ノ地方ハ從前ノ通

○第十七款 空知集治監囚人 明治十五年八月  
犯罪裁判法 第四十一號布告

空知集治監ノ囚人 假出獄免幽 罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ  
但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

○第十八款 重罪裁判所長 明治十六年一月  
ヲ定ム 第三號布告

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ內始審裁判所長ヲ以テ其裁判所長ト爲スコトヲ得  
但沖繩縣札幌縣ノ儀ハ從前ノ通りタルベシ

○第十九款 樺戶集治監囚人 明治十五年三月  
犯罪裁判法 第十六號布告

樺戶集治監ノ囚人 假出獄免幽 罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於

テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ  
但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

○第二十款 海上路程計算法 明治十五年二月  
第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

○第二十一款 書記ノ立會ヲ要 明治十六年三月  
セサル訊問 第八號布告

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ內書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得

○第二十二款 伊豆七島裁判管轄 明治十四年十月  
第五十七號布告

伊豆七島裁判事務當分該島吏へ民事ハ百圓以上及勸解並ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日施行候條此旨布告候事

○第廿三款 司法官吏巡查兵 明治十四年九月  
員使用手續 第八十二號布告

○第六類○治罪法○司法官吏巡查兵員使用手續 下六百五十九

司法官吏ヨリ巡查及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從フベシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢証及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルヲ得

但時機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルヲ得  
第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鐵臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヲ得

○第廿四款 公廷取締

明治十四年十月第八十六号布告

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供スルタメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシ公廷ニ入り看護セシムベシ此旨相達候事

○第廿五款

辯護人ヲ用ヒサル辯論  
明治十五年一月第一號布告

治罪法第二百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ

刑ノ言渡ノ効ナカルベシト有之候得共其裁判所々屬ノ代言人無之場所ニ於テハ當分ノ内辯護人ヲ用ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無効ノ限リニ在ラス

○第廿六款

集治監囚人重罪犯處分方  
明治十六年十一月第三十八号布告

樺戸空知兩集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ重罪ニ該ル者ハ當分ノ内札幌始審裁判所ニ於テ明治十五年六月第三十號布告ニ準シ處分スベシ

○第廿七款

高等法院開カサル時ノ裁判方  
明治十六年十二月第九十四号布告

治罪法第八十三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判スルヲ得

○第廿八款

無能力者代人  
民事擔當人種別  
明治十四年十二月第七十三号布告

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

○第六類○治罪法○無能力者代人民事擔當人種別

無能力者

- 一 未丁年者
  - 二 妻タル者
  - 三 白痴瘋癲人
  - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者
- 法律ニ定メタル代人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
  - 二 夫タル者
  - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
  - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人
- 民事擔當人
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
  - 二 夫タル者
  - 三 白痴瘋癲人ノ保管者
  - 四 雇主
- 但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

○第廿九款

商船内犯罪取扱規則

明治十四年十二月第六十五号布告

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スコトヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ立會人貳名以上アルヲ要ス

第三條 船長ハ証憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡ス可シ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡スヘシ

○第三十款

裁判言渡 贍本費用

明治十四年十二月 司法省甲第七号布達

治罪法第三百十五條裁判言渡ノ贍本又ハ其拔書ヲ求ムル者ハ其用紙一枚金三錢ノ費用ヲ上納スル儀ト可心得此旨布達候事

○第六類○治罪法○尚船内犯罪取扱規則○裁判言渡贍本費用 下六百六十二

○第二章 監獄則 附追達

○第一款 監獄則 明治十四年九月 第八十一号達

明治五年達監獄則及ヒ本年(三月)第拾三號達在監人給與規則同(七月)第六拾四號達在監人雇工錢規則ヲ合セテ別冊ノ通監獄則相定候條此旨相達候事但シ明治十五年一月一日以後施行ノ刑法治罪法ニ關涉スル條件ハ同日ヨリ施行スヘシ

監	獄	則
---	---	---

監獄則目錄

第一編

第一章 汎則

第二章 監署ノ規程

第三章 監獄ノ構造

第二編

第一章 役法 附時限

第二章 工錢

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ヲ受タル囚徒押送

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第三編

第一章 給與

第二章 疾病 附死亡

第三章 書信

第四章 接見

第五章 差入品

第四編

第一章 教誨

第二章 賞譽

第三章 懲罰

監獄

第一編

○第六類○治罪法○監獄則

第一章 汎則

第一條 監獄ヲ別テ左ノ六種ト爲ス

一 留置場 裁判所及ヒ警察署ニ屬スルモノニシテ未決者ヲ一時留置スルノ所トス但時宜ニ由リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルコトヲ得

二 監倉 未決者ヲ拘禁スルノ所トス

三 懲治場 懲治人ヲ懲治スルノ所トス

四 拘留場 拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スル所トス

五 懲役場 懲役ノ刑及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルノ所トス

六 集治監 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル者ヲ集治スルノ所トス

北海道ニ在ル本監ハ徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治ス

第二條 監獄ハ内務卿ノ管轄ニ屬ス但陸海軍ノ管轄ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス

第三條 集治監ハ内務卿之ヲ直轄ス留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ警視總監又ハ府知事東京府ヲ除ク縣令之ヲ管理ス

第四條 此獄則ハ特ニ陸海軍ノ獄則ヲ以テ處スヘキモノニ適用スルコトヲ得ス

第五條 内務卿ハ毎年其所屬官吏ヲシテ各監獄ヲ巡閱セシムヘシ警視總監府知事縣令ハ毎年三四次所轄ノ監獄ヲ巡閱スヘシ裁判官檢察官ハ時々其裁判所ニ屬スル監倉ヲ巡閱スヘシ府縣會議員ハ臨時其府縣監獄ヲ巡閱スルコトヲ得

第六條 在監人ト稱スルハ未決已決ノ者及ヒ第十九條第三十條ニ記載シタル者ヲ云フ

第七條 在監人ヨリ司獄官吏ノ處置ニ對シ若シ情苦ヲ訴ヘントスルトキハ第五條第一項第二項ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第二章 監署ノ規程

第八條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰例ニ照シテ犯則者ヲ決責スルノ外恣ニ責罰スルヲ得ス

第九條 典獄看守長ハ日夜不時ニ監房ノ内外ヲ視察シ或ハ物件ヲ査閲シ其他囚徒ノ傲惰ヲ生シ脱越等ノ事ナカシムルヲ要ス

第十條 新ニ入監スル者アルトキハ典獄先ツ拘引狀拘留狀収監狀又ハ所

○第六類○治罪法○監獄則



刑宣告書等ノ文書ヲ查閱シテ之ヲ領シ其領收ノ証ヲ引致シ來タル者ニ  
交付ス其文書ナクシテ引致セラレタル者ヲ入監スルヲ得ス  
未決者ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法庭ニ引  
致ノ時モ同往セシムルヲ得ス

己決囚ハ第十六條ニ記載シタル差別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

第十一條 入監ノ婦女乳兒三歲未滿ヲ携帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第十二條 新ニ入監スル者アルトキハ名籍ノ樣本ニ照シ其要項ヲ詳録シ

一 小房内ニ於テ通身ヲ搜檢シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ懲  
治人ノ監舍ニ入ルトキモ亦同シ

第十三條 總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄一々之ヲ精驗シ其危險ノ虞アル  
モノハ一切之ヲ禁スヘシ

第十四條 總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊  
ニ記載シ典獄一々証印シテ之ヲ領置シ釋放ノ時還付スヘシ其點檢ノ際  
隱匿セシ貨物ハ沒收ス

若シ其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ント請フト  
キハ之ヲ許ス

第十五條 在監人書籍ヲ看ント請フトキハ新聞紙及ヒ時事ノ論說ヲ記載

スルモノヲ除キ修身又ハ營業ニ必要ナルモノ、ミヲ許スヘシ

第十六條 己決囚ハ各刑名ニ從テ其監房ヲ別異シ又其中ニ就テ左ニ記載

シタル者ヲ別異ス

一 十六歲未滿ノ者ト滿十六歲以上ノ者

二 滿十六歲以上二十歲未滿ニシテ再犯以上ノ者ト同上ノ年齢ニシテ

初犯ノ者

三 初犯ノ者ト再犯以上ノ者

第十七條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル未決監ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス

番號ヲ以テ之ニ換フヘシ但着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫着シ其番號ヲ墨書シ  
監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿テ共犯者ヲ  
シテ共ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヲ得サラシム

第十八條 放恣不良ノ者ヲ懲治場ニ入レ矯正歸善セシメント其尊屬親ヨ

リ願出ルトキハ第二十條第一項ノ例ニ照シテ處分スヘシ

矯正歸善ノ爲メ懲治場ニ入ルヘキ者ノ年齢ハ滿八歲以上歲二十歲以下  
ヲ限トス

第十九條 懲治人ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一 刑法第七十九條第八十條第八十二條ニ從ヒ懲治場ニ留置スル幼年

○第六類○治罪法○監獄則

ノ者及ヒ瘡癩者

二 尊屬親ノ情願ニ由テ懲治場ニ入レタル者

第二十條 前條第二款ニ記載シタル懲治人ハ戶長ノ證票ヲ具スルニ非レハ入場ヲ許サス但シ在場ノ時間ハ六個月ヲ一期トシ二年ニ過ルヲ得ス入場ヲ請ヒシ尊屬親ヨリ懲治人ノ行狀ヲ試ル爲メ宅舎ニ帶往セント請フトキハ其情狀ニ由リ之ヲ許スヘシ

第二十一條 懲治人ハ左ノ年齢ニ從ヒ其居房ヲ別異ス

一 十六歳未滿ノ者ト十六歳以上ノ者

二 滿十六歳以上二十歳未滿ニシテ再ヒ懲治場ニ入シ者ト同上ノ年齢ニシテ初テ入場スル者

第二十二條 在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ處刑ノ宣告書其他必用ノ文書及ヒ領致ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ其發遣ノ途中ニ在テノ行狀ハ押送官吏之ヲ記述シテ典獄ニ知會スヘシ

在監人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ戒具ヲ用ヒ男ト女ヲ別ツヘシ但懲治人ハ戒具ヲ用ヒス

第二十三條 典獄ハ看守長及ヒ看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ録セシメ賞罰ヲ行フノ考據トナスヘシ

第二十四條 賞表ヲ與ヘタルトキハ賞譽簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ概奪シタルトキハ之ヲ删除スヘシ但其賞罰ヲ行ヒタル旨ヲ囚徒ニ示スハ

第二十六條ノ例ニ依ルヘシ

第二十五條 特赦アリタルトキハ速ニ其旨ヲ内務卿ニ申報スヘシ

第二十六條 特赦ヲ受タル者アルトキハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ在テ他ノ囚徒ヲ集メ其旨ヲ聽カシメ仍ホ之ヲ揭示スヘシ

第二十七條 假出獄ヲ許サレタル者ニハ其証票ヲ與ヘ警察遞傳ヲ以テ其居住セントスル地ニ押送スヘシ

監署ニ領置セシ金錢ハ出獄者ニ携帶セシメス其金員ヲ録シテ共ニ其地ノ警察官項ニ記載シタル官吏ニ送致スヘシ

第二十八條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者其刑期間ハ典獄ニ於テ營業ノ方法ヲ指示シ其來署ヲ要スルトキハ召喚スルコトヲ得

第二十九條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ撰テ傳告者誘工者トナス傳告者ハ官吏ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘシメ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシム但傳告者誘工者ハ滿六個月以上其用務ヲ繼續セシムルヲ得ス傳告者及ヒ誘工者ハ私ニ在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スルノ所爲アルヲ許サス

○第六類(治罪法)○監獄則

第二十條 刑期滿限ノ後賴ルヘキ所ナキ者ハ其情狀ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ營マシムルヲ得

第二十一條 刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期ノ翌日午前第十時ヲ過ヘカラス

第二十二條 死刑ノ執行ハ午前第十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

其遺骸ハ死相ヲ驗シタル後尙ホ二分時ヲ過サレハ埋葬若クハ下付スルヲ得ス

第二十三條 死刑者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ本籍ノ戶長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其監署ニ領置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニアラス

親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞付スルコトヲ得但其送費ハ親屬ノ自辨トス

若シ其物件又ハ代價ヲ受クヘキ者ナキトキハ之ヲ沒收ス

第二十四條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ前條ノ例ニ依テ處分スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一個年ヲ經ルノ後ニ非レハ之ヲ處分ス

ルコトヲ得ス

領置ノ工錢ハ第五十七條ニ照シテ處分スヘシ

第二十五條 監獄ノ近境ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ司獄官吏其形勢ヲ量リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避シムヘシ

水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ違ナキトキハ要犯疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルヲ得

第三章 監獄ノ構造

第二十六條 留置場監倉懲治場拘留場懲役場ハ每府縣ニ置キ集治監ハ適當ノ地ニ之ヲ置クモノトス

留置場監倉決治場拘留場懲役場一區畫内ニ在ルモノハ墻壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第二十七條 未決監已決監及ヒ懲治場ハ男監女監ノ別ヲ嚴割スヘシ

甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼是交談シ又ハ物件ヲ交遞スルノ便ヲ得サラシムヘシ各監房ノ鑰匙ハ其製式ヲ同シク甲乙適用スルヲ要ス

第二十八條 密室ハ監倉ニ設ケ他人ト交通スルコトヲ得サラシムヘシ

閤室ハ已決監ニ設ケ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要

○第六類○治罪法○監獄則

ス密室闇室ハ一室一人ヲ限トス

第三十九條 接見室ハ監舎ノ首部ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之ニ縱横ノ格子ヲ嵌メ格子ヨリ三尺許ヲ距リ柵欄ヲ設ケ在監人ハ格子内ニ立シメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシムヘシ但懲治人ノ接見室ハ此例ヲ用ヒス

第四十條 燈火ハ監房外ニ置キ障碍スルノ虞ナカラシムヘシ

第四十一條 死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ牆壁ヲ以テ外見ヲ防グベシ

第二編

第一章 役法 附時限

第四十二條 定役ニ服スル者ノ作業ハ刑名ニ因テ之ヲ斟酌シ每囚一日ノ科程ヲ定メテ服役セシム滿十二歳以上十六歳未滿ノ者滿六十歳以上ノ者及ヒ病後ノ疲勞若クハ身體ノ虛弱ニ因リ勞作ニ勝ヘサル者ハ體力ニ應シ作業ノ科程ヲ寬恕ス

若シ己ムヲ得ス外役ニ服セシムルトキハ鐵鎖ヲ用テ二囚毎ニ聯絆シ笠ヲ用テ晴雨ヲ其面ヲ掩ハシム但外行ノ囚徒ハ一組十人以上十五人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム  
外役ノ囚徒道路往來スル時ハ務メテ他人通行ノ妨ト爲ラサシムルヲ要ス

第四十三條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整

列セシメ看守長及ヒ看守點檢ヲナスヘシ歸監セシムル時モ亦同シ

第四十四條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス父母ノ喪ニ遭フ者モ亦一日免役ス

一月一日

一月二日

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

神武天皇祭

秋季皇靈祭

神嘗祭

天長節

新嘗祭

十二月三十一日

第四十五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業者若クハ工業殊等ノ囚ヲシテ

之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授ルヲ要ス

第四十六條 定役ニ服セサル囚徒ト雖モ典獄之ヲ勸誘シテ其將來ノ生業

ヲ計リ攝生又ハ親屬扶助ノ爲メ勞作セシト請フニ至ラシムルヲ要ス其

工業ノ種別ヲ定ムルハ典獄ノ指示ニ依ル

未決監ニ在ル者坐作ノ業ヲ爲サント請フトキモ亦同シ

第四十七條 懲治人ニハ教誨ニ充ル爲メ服役時間表ニ準シ七時ニ過キサ

○第六類○治罪法(監獄則)

ル時間休憩時  
除農業若シハ工藝ヲ教ヘ力作セシムヘシ

○時限

第四十八條 未決者及ヒ定役ニ服セサル已決囚ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎日一時間以内監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第四十九條 定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前一時前後ニ至テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス飯後暫時休憩シ再ヒ就役日没前罷役セシム其時間ハ別表ニ之ヲ定ム其時宜ニ由リ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及ヒ就役罷役其他ノ動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第五十條 科程ヲ終リタル者ハ時限ニ拘ハラズ罷役セシム  
午飯ニ就カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヲ驗視スヘシ若シ偷懶ニシテ怠役スル者ハ飯後ノ休憩ヲ許サス

第二章 工錢

第五十一條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始テ各自ノ工錢ヲ科

定シ之ヲ十分シ重罪囚ニハ其一分輕罪囚ニハ其二分ヲ與ヘ餘分ハ之ヲ監署ニ收ム

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決監ニ在ル者並ニ第十九條第一款ニ記載シタル懲治人ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ收メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒ニシテ日當ノ科程ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢モ又同シ

第五十二條 第十九條第二款ニ記載シタル懲治人ニシテ其尊屬親ヨリ衣食費ヲ自辨スル者ノ工錢ハ其全分ヲ與ヘ衣食費ヲ自辨スルヲ能ハサル者及ヒ第三十條ニ記載シタル者ハ工錢ノ内ヨリ衣食費ヲ扣除シ餘分ハ之ヲ與フ

第五十三條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第五十四條 各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應シ一日若干錢ト定ムヘシ

第五十五條 監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ニ由リ親屬ニ贈與スルヲ許シ又ハ書籍其他必要ノ物品及ヒ第六十九條ニ從ヒ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヲ得

○第六類○治罪法○監獄則

第五十六條 在監人死亡シ監署ニ領置ノ工錢アルトキハ第二十三條ノ例ニ照ラシテ處分スヘシ

第五十七條 在監人若シ逃走シタルトハ已決囚ノ工錢ハ之ヲ沒收ス未決者及懲治人ノ工錢ハ其親屬ニ下付ス親屬無レハ之ヲ沒收ス

第三章 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押送

第五十八條 徒刑流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒押送書ノ謄書ヲ具シテ内務卿ニ申報シ其指揮ニ從ヒ警察遞傳ヲ以テ集治監ニ押送スヘシ

北海道集治監ニ於テ管束スヘキ徒流刑ノ囚徒ハ本監官吏ノ臨時派出シタル地マテ押送スヘキモノトス

第五十九條 北海道ニ在ル集治監ハ毎歲三四次官吏ヲ派出シ前條第二款ノ例ニ從ヒ押送シタル徒流刑ノ囚徒ヲ受取ヘシ

第六十條 徒刑流刑ノ囚徒ヲ押送スル時ハ戒具ヲ用ヒ男囚ト女囚トヲ別ツヘシ遞船中ニ在テハ戒具ヲ用ヒサルモ妨ナシ

第四章 假出獄免幽閉ノ者ニ貸與スル屋舎

第六十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒流刑ノ者其地ニ居住スヘキ家ナキトキハ屋舎ヲ貸與スヘシ

屋舎ヲ構造スルハ將來市街村落ヲ創置スルノ便ヲ計畫スルヲ要ス

第六十二條 假出獄免幽閉ヲ受ケタル徒流刑ノ者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キ同居セント請フトキハ典獄將來營生ノ方法ヲ取糺シ之ヲ許否スヘシ

前項ノ請ヲ許ストキハ其配偶者又ハ其他ノ親屬現住スル地ノ戸長ニ通告スヘシ

其徒刑流刑ノ者嫁娶ヲ爲サントスルトキハ監署ニ申告セシメ典獄之ヲ許否スヘシ

第三編

第一章 給與

第六十三條 已決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス

第六十四條 未決者ノ衣類ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ自辨スルヲ能ハサル者ハ之ヲ貸與ス

第六十五條 已決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺葱色トス

第六十六條 獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ分ツ男ノ通常服ハ長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス

○第六類○治罪法○監獄則

獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ  
第六十七條 在監人ニ貸與スル衣類雜具

通常服

一單衣

一衿

一綿入衣

一襦袢

就役服

一單短衣

一衿短衣

一綿入短衣

一襦袢

一股引

雜具

一蒲團

一蚊帳

一莞筵

一枕

- 一帯長三尺
- 一禪尺長三尺
- 一手巾
- 一蓑
- 一笠

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澁濯補綴シテ其用ニ充ルヲ得

第六十八條 在監人一人一日ノ食糧

- 一 下白米十分ノ四
- 一 挽割麥十分ノ六

七合

強キ力業ニ服スル者

一同

五合

輕キ力業ニ服スル者

一同

四合

工役ニ服セサル者及ヒ

一同

三合

滿十歳以上ノ未決者

一業

金壹錢五厘以下

地方ノ便宜ニ依リ粟稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルヲ得

第六十九條 工業ニ勉勵シテ食費ヲ償フヘキ工錢ヲ得ル者及ヒ其幾倍ヲ得ル者等ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金三錢ヲ過ルコトヲ得ス

○第六類ノ治罪法ノ監獄則

定役ニ服セサル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得ス

第七十條 在監人日用ノ雜費 澣濯補綴又ハ炊用ノ薪炭 其他一身ニ係ル日常諸費ハ一人一日金壹錢貳厘以下トス

第七十一條 監房常置ノ器具

一貯水器并ニ飲器

一唾壺

一便器

一小箒

一洗手盆

木製

同

木製大小二種但監房ニ厠間ノ接續スルモノニハ此器ヲ用ヒス

草ノ種類ヲ以テ製作セシ軟カナルモノ

木製

第七十二條 浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月マテハ五日毎ニ一次十月ヨリ五月マテハ十日毎ニ一次トス

第七十三條 已決囚及ヒ懲治人ノ髮ハ常ニ之ヲ短薙シ鬘鬚アル者ハ常ニ剃除セシム但未決者ハ此限ニ在ラズ

婦女ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルヲ許サズ

第七十四條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ澣ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗スヘ

カラス

第二章 疾病 附死亡

第七十五條 在監人疾病ニ罹レハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム

懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第七十六條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ルコトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメ典獄之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第七十七條 傳染病侵襲ノ兆アルトキハ其消毒豫防ヲ慎重ニスヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ病性及ヒ感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫師ノ診察書ヲ副ヘ各其所屬長官ニ報告スヘシ

○死亡

第七十八條 在監人死亡スレハ典獄看守長醫師并葎テ之ヲ驗屍スヘシ未決者又ハ已決囚ニシテ別故アリ再ヒ訊問ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七十九條 死者ノ親屬若クハ故舊第三十三條ニ記載シタル時限ヨリ二十四時以內ニ在テ遺骸ノ下付ヲ請フトキハ之ヲ許シ其者ヲシテ簿冊ニ

○第六類 ○治罪法 ○監獄則



署名押印又ハ花押セシムヘシ  
遺骸ヲ請フ親屬故舊ナキトキハ棺ニ入テ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツベ  
シ其標ハ約ネ面ニ寸長三尺五寸トス

第三章 書信

第八十條 已決囚其親屬故舊ニ書信ヲ贈ルハ六個月間ニ一次トシ一通ニ  
過ルコトヲ得ス但其他官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又ハ親屬  
故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏ニ於テ法律ニ觸ルコトナク且必用ト認  
メタルトキハ此限ニ在ラス

第八十一條 未決者ニ係ル書信ハ定限ナシ但豫審判事又ハ檢事ノ檢閱ヲ  
經ルニ非レハ贈答セシムルヲ得ス

第八十二條 懲治人及ヒ幼年ノ已決囚其親屬故舊ニ贈ル書信ハ一個月一  
次トシ一通ニ過ルコトヲ得ス

第八十三條 在監人ノ發スル書信ハ典獄之ヲ檢閱スヘシ若シ書中忌諱ニ  
涉ル等ノ文意アルトキハ通信ヲ許サズ

第八十四條 外國ヨリ在監人ニ贈リ來タル書信ハ典獄之ヲ檢閱シ適正ノ  
事項ヲ陳ヘ又ハ遷善ノ諭示ヲ主トシタルモノニ限り之ヲ本人ニ付與ス  
若シ在監人ノ改悛ヲ妨ルモノト認ルトキハ之ヲ付與セス

第八十五條 信書ヲ檢閱スルハ先ツ直行ヲ順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ橫讀  
シ嫌疑ノ文意アリヤ否ヲ詳查スヘシ

第八十六條 在監人ヨリ發スル信書ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ緘  
シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某監獄署ト記シ之ヲ遞送ス  
但郵便稅ハ自辨セシム

親屬故舊若クハ辨護人ノ信書ハ典獄署ニ宛之ヲ差出サシムベシ  
第四章 接見

第八十七條 在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ監獄先ツ之ニ面接シ  
テ其氏名族籍營業等ヲ訊ヒ其緣由ヲ詳悉シ己ムヲ得サルノ事狀アリテ  
形跡ノ疑フヘキコトナキトキハ之ヲ許シ看守長看守並蒞テ面會セシム但  
密室ニ在ル者ハ接見ヲ許サズ

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ面會ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話  
ヲナシタルトキハ直ニ之ヲ停止ス

第八十八條 死刑ノ執行及ヒ徒刑流刑監獄ノ刑ヲ受タル囚徒ヲ集治監ニ  
押送ノ以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フトキハ前條第一項ノ例ニ  
依テ之ヲ許ス但面會時間ハ五十分時ヲ過ルヲ得ス

第五章 差入品

○第六類○治罪法○監獄則

第八十九條 未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服臥具又飲食物炊烹ヲ要セサルモノニシテ贈ラツト請フトキハ之ヲ許ス但酒又ハ煙草其他衛生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス

第九十條 已決囚ニハ書籍用紙ノ外一切差入品ヲ許サス

第九十一條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者親屬故舊ヨリ金錢衣服夜具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

第四編

第一章 教誨

第九十二條 已決囚及ヒ懲治人教誨ノ爲メ教誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第九十三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日ノ午後ニ於テ其講席ヲ開クモノトス

第九十四條 懲治人ニハ毎日三四時間讀書習字算術度量圖書等ノ科目中ニ就キ之ヲ教フヘキモノトス

學科ハ懲治場ノ教場ニ於テ之ヲ研究セシメ其學業ノ進歩ヲ表スル爲メ就學ノ年月卒業ノ科目學業ノ優劣及ヒ行狀ノ良否氏名年齡等ヲ簿冊ニ記載シ巡閱官吏ノ檢閲ニ供シ又ハ其尊屬親ニ示スコトアルヘシ

第九十五條 各監房内ニ左ノ諸款ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ易カラシムヘシ若シ文字ヲ識ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時内ニ於テ之ヲ讀ミ聽カスヘシ

揭示

- 一 在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スベシ
- 一 平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就クトキハ慎テ容止ヲ正フス未決監ニハ此款ヲ除ク
- 一 每朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜スヘシ
- 一 每朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及ヒ席壁圍廁等ヲ掃除スヘシ
- 一 窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ハ唾キ貯水ヲ濫用スルヲ禁ス
- 一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ全往ノ者ト交談シ及ヒ手ヲ交ヘ或ハ路人ニ聲語スルヲ禁ス
- 一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ說話或ハ發聲又ハ濫リニ起步スルヲ禁ス但晝間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀スルヲ禁ス
- 一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ若クハ賭博類似ノ惡戲ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所爲アル

ヲ禁ズ

- 一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工場ニ至ルヲ禁ズ 未決監ニハ此款ヲ除ク
- 一 許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ズ
- 一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラズ直ニ看守所ニ通聲スヘシ
- 一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非レハ翌朝ニ至テ醫療ヲ乞フヘキモノトス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ
- 一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタルトキハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ
- 一 病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保ニ力ヲ致スヘキハ勿論其看病人ヲラシムル者ハ切實ニ之ヲ看病スヘシ
- 一 水火風震等ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ
- 右ノ諸款ニ違フ者及ヒ違フ者アルヲ知テ告ケサル者又ハ官吏ヨリ犯者ヲ問フニ當リ之ヲ舉ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分スヘキモノナリ

第二章 賞譽

某監獄署

第九十六條 已決囚獄則テ謹守シ且改悛ノ行爲著キ者ト典獄ニ於テ確認スルトキハ之ヲ賞譽スヘシ

第九十七條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖肩間ノニ方二寸曲尺ノ淺葱色ノ布ヲ縫着スヘシ

第九十八條 賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ考據ト爲スヲ得第九十九條 賞表ヲ得タル者ニハ二個月ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ通信スルヲ許ス

第一百條 已決囚若シ在監人ノ逃走ヲ密告又ハ捕得シ或ハ監獄ニ係ル水火災ヲ防禦シ人命ヲ救援シタル者アレハ金二十五錢以下ヲ賞與シ其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請ニ由リ必用品又ハ食物ヲ購求スヘシ但第九十七條ノ賞表ヲ與フルノ限ニ在ラズ

第一百一條 未決監ニ在ル者前條ノ勞働アルトキハ之ヲ錄シテ檢察官及ヒ裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第一百二條 懲治人第一百條ニ適シタル勞働アルトキハ金二十五錢以下ヲ以テ適宜物品ヲ購ヒ之ヲ與フヘシ

第三章 懲罰

第一百三條 已決囚獄則テ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

第六類 ○治罪法 ○監獄則

一 絕信 親屬故舊ト書信接見ヲ絶ス

二 屏禁 晝夜他ノ監房又ハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ服役時  
限表ニ照シテ座作ノ役ヲ科ス

三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス仍  
ホ臥具ヲ禁ス

第百四條 絶信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食閤室ハ七晝夜ヲ限トス  
減食閤室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキトキハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ科  
スルコトヲ得

第百五條 懲治人及ヒ十六歳未滿ノ己決囚獄則チ犯ストキハ其輕重ヲ量  
リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一 獨慎 晝夜一室ニ獨居セシム

二 減食 常食ノ半以內ヲ減ス但菜ヲ減スルノ限ニ在ラズ

第百六條 獨慎ハ七晝夜以內減食ハ三日以內トス

第百七條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ同監ノ者ヲ  
煽惑シ又ハ其他ノ規則ヲ犯ストキハ所犯ノ輕重ヲ量リ第百三條第百五  
條ニ準擬シ減食スルコトヲ得

第百八條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受タルトキハ賞表一箇又ハ數箇ヲ褫奪

ス

第百九條 無期徒刑ノ囚徒逃走シ若クハ獄舎獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫

ヲ爲シ其他重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ三月以上五年以下兩脚又ハ一脚  
ニ鉄ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其鉄ニ貫キ腰間ニ綴帶セシメ繚  
幣ノ所ニ下鍵ス但監房ニ在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處  
罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上二貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス  
丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハス者トス其外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ  
貳人聯絆ノ法ニ從フ

第百拾條 減食或ハ閤室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診視セ  
シメ身體ニ妨ナキトキヲ証シテ後之ヲ行フヘシ

第百拾一條 屏禁減食閤室又ハ獨慎ノ罰ニ處シタル後ハ典獄若クハ看守  
長時々其動靜ヲ窺察シ狀況ニ由リ醫師及ヒ教誨師ヲシテ之ヲ問ハシム  
ルコトアルヘシ

第百十二條 罰則ニ處セラレタル者改悛ノ狀著ル、トキハ之ヲ免スルコ  
トヲ得

第百十三條 假出獄免幽閉ヲ受タル徒刑流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日以下之ヲ拘置スルコトヲ得

(典獄(檢印)) 懲治人名籍

主檢

書記(氏名印)

「横線以下朱書」

本生	國郡(町村)番地住何某(男弟女孩)
山籍地管	何國郡(町村)産 族籍
氏名籍地管	何某 某年某月某日生
年	當何年何月何年何月
懲治人及ヒ尊屬親ノ營業	懲治人ノ營業 士願者タル尊屬親ノ營業
親屬	父母兄弟及ヒ配偶者等ノ有無
入場ノ年月日	明治何年何月日午(前後)第何時入場
入場ノ事狀	
身材	長何尺何寸何分肥瘠強弱

容貌 音聲	面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑、瘰癧、癩癧、黑痣、癩風、天皰、創癩ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス
教・育・門及	入場ノ時文字ヲ知ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 入場後進學ノ景況 何宗或ハ宗門不詳
入場中ノ賞罰	明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ
書信贈答ノ月日	何年何月日何國郡(町村)任親屬若シハ朋友ニ書信發來
懲治場ニ留置ノ宣告ヲナセシ裁判所	明治何年何月何日某裁判所ニ於テ若干年月日留置ノ宣告
曩ニ處斷ヲ經シ者ナル時ハ其事由	犯由ノ大畧及ヒ某裁判所
事 變	明治何年月日病死或ハ變死或ハ逃走或ハ他監ニ移ス
放 還	明治何年月日某家ニ放還
(典獄(檢印)) 未決者名籍	主檢 書記(氏名印)
「横線以下朱書」	

○第六類○治罪法○監獄則

本出生	本出生	營業及ヒ親屬	乳兒提携	入監ノ年月日時及ヒ罪件	身材	容貌音聲	教育及ヒ宗門	入監中ノ賞罰	書信ノ贈答	
某管下國郡(町村)番地住又ハ何某子弟妻女 何國郡(町村)産 族籍 何某 某年某月某日生 當何年何月何年何月	業營ヲ詳記ス可シ 父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無 男或ハ女 叔監ノ時何歳何ヶ月 明治何年月日午(前後)第何時入監 何罪ヲ犯ス	長何尺何寸何分肥瘠強弱 面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ墨白四肢ノ姿態其他痘斑癩子癩癩黑痣癩風天鰲創癩ノ類及ヒ音聲ノ高低 チモ細緻ニ具辨ス 文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 何宗或ハ宗門不詳	明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ 明治何年月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ書信ヲ許ス月日	裁判長ノ氏名死刑ハ裁判長ノ外其行刑ヲ臨監セシ官吏ノ氏名 明治何年月日保釋若クハ責付	明治何年月日病死或ハ變死或ハ脱監 明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執行 又ハ他監押送	(興獄(檢印)己決囚名籍 主檢 書記(氏名印)	當該官ノ氏名 裁判長ノ氏名 明治何年月日保釋若クハ責付	保釋 明治何年月日保釋若クハ責付	事變 明治何年月日病死或ハ變死或ハ脱監	終結 明治何年月日放免若クハ刑ノ宣告執行 又ハ他監押送

本出生	本出生	營業及ヒ親屬	乳兒提携
某管下國郡(町村)番地住又ハ何某子弟妻女 何國郡(町村)産 族籍 何某 某年某月某日生 當何年何月何年何月	業營ヲ詳記ス可シ 父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無 男若クハ女 叔監ノ時何歳何ヶ月 明治何年月日午(前後)第何時入監 何罪ヲ犯ス	長何尺何寸何分肥瘠強弱 面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ墨白四肢ノ姿態其他痘斑癩子癩癩黑痣癩風天鰲創癩ノ類及ヒ音聲ノ高低 チモ細緻ニ具辨ス 文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 何宗或ハ宗門不詳	明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ 明治何年月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ書信ヲ許ス月日

○第六類○治罪法○監獄則

刑名及ヒ宣告ノ月日裁 判所ノ名稱	何刑若干年月日 明治何年月日何裁判所ニ於テ宣告
收監ノ年月日	明治何年月日午(前後)第何時入監
犯由ノ大略 及ヒ犯數	財物ヲ竊取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大略ヲ記ス若 シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ某裁判所ニ於テ何刑ニ 處セラル
身 材	長何尺何寸何分肥瘠強弱
容貌 音聲	面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘 斑瘰癧子、癭瘤、黑痣、癩風、天鰲、創癩ノ類及ヒ音聲ノ高 低チモ細緻ニ具載ス
教育及ヒ宗門	文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナ ス 何宗或ハ宗門不詳
入監中ノ賞罰	明治何年月日何ノ賞罰ヲ行フ
書信 贈答 ノ年月日	明治何年月日何國郡(町村)住親屬若クハ朋友ニ書信(發 來)
假出獄免幽閉	明治何年月日何月何日假出獄或ハ免幽閉
事 變	明治何年月日病死或ハ變死或ハ脱監 或ハ何罪ヲ犯シ後ク未決監ニ入ル

終 結	明治何年月日滿期放免又ハ特赦 假出獄ノ證票
身 材	某管下國郡村番地住又ハ何某子弟妻女 族籍 何某 某年某月某日生 明治何年月何月何年何ヶ月
名籍ノ標本ニ倣 ヒ詳記スヘシ	
容 貌	
上ニ全シ	
罪質犯數	
刑名刑期	
及ヒ附加刑	
何年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受 ケ何年月日ヨリ執行何年月日滿期	
一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ本日 出獄ヲ許シ何地ヲ通過シ居 住スヘキ何地ヘ約ネ何日迄ニ到着シテ 即時其地ノ警察官ニ届出テ此	

○第六類○治罪法○監獄則

証書ヲ納メタル上住宅ヲ定ムヘキ旨申渡シタル事

一此者ハ本刑期限間特別監視ニ付セラレタル事

一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スコトアルルハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セラレサル事

一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滯留スルトキハ滯留地ノ警察官ヨリ其證書ヲ受ケ居住地ニ到着ノ上此證書ト共ニ居住地ノ警察官ニ差出スヘキ旨申渡シタル事

右之通心得サセ假出獄ノ証票ヲ與フル者也

某監獄署

明治何年 月

署 日 印

長官 何某

印

○假出獄ヲ受タル者所有金アルトキハ此証票ノ裏面若クハ欄内ニ左ノ二款ヲ附記スヘシ

一此者ノ所有金ハ當監署ヨリ其居住スヘキ地ノ警察官ニ送り遣シタル事

一警察官ヘ送り遣シタル金圓ハ其居住地ニ到着ノ後何日ニテモ受取得ヘキト雖ヒ同官ニ於テ正當ノ入用ナリト認定ノ上ニ非レハ一次ニ之

ヲ渡サ、ルヘキ事

料紙半紙

(括弧)内來書

- 一在監人ヨリ其親屬故舊ニ送ル書信ハ此紙ニ書寫スヘシ
- 一書信ノ文句規則ニ背キタルコトアルトキハ其送致ヲ止メ仍ホ相當ノ罰ニ處スルコトアルヘシ

日月年治明○紙信書人監在○署獄監(某下管何)



囚徒服役時限表

月名	起	就	小憩	午飯	罷役	晚飯	還房	服役時間合計
一月	午前七時 〇二分	午前八時 〇二分	午前第十 分	正午十二 十分	午後三時 三十分	一時二十 八分	午後四時 五十八分	六時二十 六分
二月	六時三十 八分	七時三十 八分	第十時 五分	十二時 一分	三時五十 三分	一時三十 二分	五時二十 二分	六時五十 七分
三月	六時〇六 分	七時〇六 分	同上	同上	四時	一時五十 四分	五時五十 四分	七時三十 五分
四月	五時三十 二分	六時三十 二分	第九時四 十分	同上	四時三十 分	一時五十 八分	六時二十 八分	八時三十 八分
五月	五時〇一 分	六時〇一 分	第九時三 十分	十二時三 十分	五時	一時五十 八分	六時五十 八分	八時五十 九分
六月	四時四十 九分	五時四十 五分	同上	十二時二 十分	五時二十 分	一時五十 四分	七時十四 分	九時〇五 分

下七百

	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
約ネ日出	四時五十 一分	五時十六 分	五時四十 八分	六時二十 二分	六時五十 二分	七時〇八 分
ノ時刻ヲ	同上	同上	同上	同上	同上	同上
以テ起床	同上	同上	同上	同上	同上	同上
ノ時刻ト	同上	同上	同上	同上	同上	同上
ナス然ル	同上	同上	同上	同上	同上	同上
ニ年々	同上	同上	同上	同上	同上	同上
節ニ早晚	同上	同上	同上	同上	同上	同上
右ノ時間	九時五十 九分	一時五十 四分	一時五十 一分	一時四十 九分	一時四十 八分	一時三十 二分
ニシテ工	同上	同上	同上	同上	同上	同上
器ヲ併理	同上	同上	同上	同上	同上	同上
シ及ヒ爲	同上	同上	同上	同上	同上	同上
浴等ヲ爲	同上	同上	同上	同上	同上	同上
サシム	同上	同上	同上	同上	同上	同上
約ネ日没	七時〇九 分	六時四十 四分	六時十一 分	五時三十 七分	五時〇八 分	四時五十 二分
ノ時刻ヲ	同上	同上	同上	同上	同上	同上
以テ入監	同上	同上	同上	同上	同上	同上
ノ時刻ト	同上	同上	同上	同上	同上	同上
ナス	同上	同上	同上	同上	同上	同上
右ノ時間	八時四十 九分	八時〇四 分	八時十二 分	七時〇三 分	六時十三 分	六時十二 分

第六類 治罪法 監獄則

下七百一

ア秒リ日々  
分秒ニ加  
刻ルニ東  
フ西國ノ  
別由テ此  
レノ地モ  
ニ於テモ  
分秒ノ差  
異ナキハ  
保ツナキ  
ス故ニ月  
毎ニ大均  
之ヲ平均  
シテ姑ク  
其起床時  
刻ヲ登載  
ス各官地  
司獄官此  
表ノ區分  
ナシ宜ク  
酌シテ裁  
ハシメテ  
シテ役ス

○第二欸

別房留置者  
犯則處分法

明治十六年十二月  
第六十二号達

監獄則第三十條ニ依リ監獄中ノ別房ニ留置シタル者及ヒ刑法附則第三十  
二條ニ依リ別房ニ留置シタル者若シ監内ノ諸則ヲ犯ストキハ監獄則第百  
七條ニ準擬處分ス可シ此旨相達候事

○第三欸

賭博犯人服役方

明治十七年一月  
第十号達

本年第一號布告ニ據リ懲罰ニ處シタル賭博犯人ハ明治十四年九月第八十一  
號達監獄則第一條第五項禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ニ準シ服役其他ノ方  
法共總テ該則ニ依テ處分スヘシ此旨相達候事

○第三章 軍律

○第一欸 陸軍治罪法

明治十六年八月  
第廿四号布告

陸軍治罪法目錄

第一章 總則

第二章 軍法會議ノ構成

○第六類○治罪法○別房留置者犯則處分法○陸軍治罪法 下七百三

第三章 軍法會議ノ權限

第四章 陸軍檢察

第五章 審問

第六章 判決

陸軍治罪法

第一章 總則

第一條 陸軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セス但官物ノ損害ニ係ルノ賠償ハ此限ニ在ラス

第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限り之ヲ許ス

第三條 軍人ト稱スル陸軍刑法第三條第九條ニ掲クル者ヲ謂フ

第四條 司令官ト稱スルハ軍團長師團長旅團長軍管司令官營所司令官及ヒ合圍ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條 普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第一百條第一百一條規則ハ此治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス

第六條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判ス可

キ時ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス

第二章 軍法會議ノ構成

第七條 軍法會議ハ各軍管ニ一箇若シハ數箇ヲ設ク

軍中ニ於テハ軍團師團旅團ニ軍法會議ヲ設ク合圍ノ地ニモ亦軍法會議ヲ設ク

第八條 軍法會議ニハ判士長判士理事理事補審事補錄事ヲ置ク

第九條 軍法會議ハ佐官一名ヲ判士長ト爲シ尉官三名理事理事補ノ内一名ヲ以テ判士トス

但被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更フ

判士長	判士	被告人
佐官一名	尉官三名 理事一名	陸海軍少尉准士官及ヒ同等軍人ノ軍屬
佐官一名	大尉一名 中尉二名 理事一名	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬

第六類 治罪法 陸軍治罪法

中佐 一名	少佐 一名	中佐 一名	大佐 一名	少佐 一名	中佐 一名	大佐 一名	少佐 一名	中佐 一名	大佐 一名	少佐 一名
陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大佐及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名
陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名
陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名
陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名	中尉 一名	大尉 一名	少尉 一名
陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬	陸海軍少尉及ヒ同等ノ軍人軍屬

第十條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

佐官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿之ヲ命ス尉官ヲ以テ判士ト爲ス時モ亦同シ

第十一條 軍團長及ヒ獨立師團長ハ部下ノ將校ニ其軍法會議ノ判士長判士ヲ命スルコトヲ得又理事審事缺員スル時ハ部下ノ將校ニ命シテ其職務ヲ行ハシメ錄事缺員スル時ハ下士ニ命シテ其職務ヲ行ハシムルコトヲ得

臨戰若シハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官部下ノ將校若シハ其地ニ在ル將校中ヨリ撰ミ專任判士ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハラヌ之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合ニ於テハ他ノ官吏ヲ以テ之ヲ補充スルコトヲ得

第十二條 軍管軍法會議ニ於テ判士長判士ニ充ツ可キ將校缺員スル時ハ軍管司令官ノ上申ニ依リ陸軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若クハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移シテ其審判ヲ爲サシム

第三章 軍法會議ノ權限

第十三條 軍法會議ハ其軍管若シハ師管ノ所管地方ヲ以テ管轄ト爲ス

第十四條 軍人管轄地外ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ其地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得

第十五條 軍人數箇ノ軍法會議ノ管轄地内ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時

○第六類 ○治罪法 ○陸軍治罪法

ハ被告人ヲ逮捕シタル地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス  
第十六條 軍團師團旅團軍法會議ハ其團所屬軍人ノ犯シタル重罪輕罪ヲ  
審判ス

第十七條 俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス  
第十八條 軍人任官若クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺スル者ハ軍  
法會議ニ於テ之ヲ審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發  
覺スル者ハ司法裁判ニ付ス

歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺ス  
ル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發覺スル者  
ハ司法裁判ニ付ス

第十九條 軍人二人以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時ハ先  
キニ審問ニ着手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス海軍軍人軍屬ト共犯  
ニ係ル時モ亦同シ

第二十條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍法會  
議ニ於テ之レヲ審判ス

第二十一條 陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ  
於テ之ヲ審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條 軍法會議ハ重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦之ヲ審判ス  
第二十三條 軍中若シクハ合圍ノ地ノ軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判  
ニ着手シタル者ハ陸軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ管理ス可  
キ官司ニ送致ス可シ

第四章 陸軍檢察

第二十四條 陸軍檢察ハ陸軍ニ關スル犯罪ヲ搜查シ証憑ヲ拾収ス

第二十五條 左ニ記列スル諸官ハ司令官ノ命令ヲ受ケテ陸軍檢察ノ職務  
ヲ行フ

要塞副官若クハ衛戍副官  
憲兵ノ將校下士

衛兵司令

砲兵工兵ノ監護

第二十六條 要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長及ヒ各所管ノ長  
官ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢  
察ノ處分ヲ爲シ若クハ陸軍檢察官ニ委シテ其處分ヲ爲サシムルコトヲ  
得

審事其職務ヲ行フノ際現行犯アルコトヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ

○第六類○治罪法○陸軍治罪法

處分ヲ爲スコトヲ得

第二十七條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害セラレタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ陸軍檢察官被告人所屬ノ長官隊長若クハ司法檢察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十八條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ第二十七條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第二十九條 陸軍所屬ノ官吏職務ヲ行フニ因リ軍人ノ重罪輕罪ヲ犯ス者アルコトヲ知リタル時ハ其職務ヲ行フノ地ノ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長ニ告發ス可シ

第三十條 軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得

其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ陸軍檢察官司法警察官憲兵卒若クハ巡查ニ交付ス可シ

第三十一條 司法警察官憲兵卒及ヒ巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ陸軍檢察官ニ引致ス可シ

第三十二條 司法警察官軍人ニ係ル告訴告發ヲ受ケタル時ハ速ニ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長ニ交付ス可シ

第二十三條 告訴人告發人ハ願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更センコトヲ請求スルコトヲ得

第二十四條 陸軍檢察官軍人ノ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ直ニ犯所ニ臨檢シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ル可シ其引致ヲ受ケタル時モ亦同シ

第二十五條 陸軍檢察官要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長各所管ノ長官檢察ノ處分ニ處シタル時ハ調書ヲ作り證憑文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第五章 審問

第三十六條 司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ左ノ諸項ヲ除クノ外事件ノ難易ニ從ヒ理事ニ下付シ審事ヲシテ其審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ其判決ニ付ス可シ

被告人上長官以上ナル時ハ軍管司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ具申ス可シ營所ニ於テ被告人士官以上ナル時ハ營所司令官之ヲ軍管司令官ニ具申ス可シ

第三十七條 陸軍卿審問ノ命令ヲ下ス時ハ其事件ヲ司令官ニ交付シ司令官ハ之ヲ理事ニ下付ス可シ

○第六類○治罪法○陸軍治罪法

第三十八條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官被告人ノ官等ニ拘ハラズ直ニ其審問ノ命令ヲ下スコトヲ得

第三十九條 審事審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發シ其被告人出廷シタル時ハ即日之ヲ訊問ス可シ

第四十條 審事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ拘引狀ヲ發スルコトヲ得

第四十一條 審事ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ漂滅シ若クハ逃走ノ恐アル時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クルノ恐アル時ハ直ニ拘引狀ヲ發ス可シ

第四十二條 審事ハ召喚狀若クハ拘引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其他ノ陸軍檢察官若クハ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十三條 審事ハ召喚狀若クハ拘引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ証明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十四條 審事ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ理事ヲ經

テ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

司令官ハ各軍管司令官營所司令官及ヒ各控訴裁判所ノ檢事長ニ人相書ヲ送り其逮捕ヲ求ム可シ

第四十五條 審事ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發スルコトヲ得

收禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ス又其收禁ヲ要セサル者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ解ク可シ

第四十六條 審事ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得其處分ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作ル可シ

若シ其場所遠隔ノ地ニ在ルトキハ其地ノ審事若シクハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十七條 審事ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シテ被告人ニ關係スル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得若シ其場所遠隔ノ地ニ在ルトキハ第四十六條第二項ノ例ニ依ル

第四十八條 審事ハ證人及ヒ通事ヲ呼出スコトヲ得

證人皇族若クハ勅任官ナル時ハ審事其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

○第六類○治罪法○陸軍治罪法

証人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ証明シタル時ハ審事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ  
 証人若シ遠隔ノ地ニ住ル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑托スルコトヲ得  
 第四十九條 審事ハ被告人及ヒ証人ノ訊問ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作り訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人若クハ証人ニ讀示セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記スヘシ  
 被告人及ヒ証人ハ其陳述ヲ變更増減センコトヲ請求スルコトヲ得  
 第五十條 審事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スル時ハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ命シテ其鑑定ヲ爲サシム可シ  
 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記シ署名捺印ス可シ  
 第五十一條 審事ハ証人鑑定人通事正當ノ事故ヲ證明セスシテ其呼出ニ應セサル時ハ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ  
 但審事ハ其証人ニ對シ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

証人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百八十條ニ依リ又鑑定人鑑定ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ  
 第五十二條 証人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第廿七條ニ從フ但罰金ヲ禁錮ニ換フル時亦審事之ヲ命ス  
 第五十三條 審事審問ニ於テ餘罪ヲ覺擧シタル時ハ直ニ本件ト共ニ審問ス可シ  
 共犯ヲ覺擧シタル時ハ理事ヲ經テ之ヲ司令官ニ具申ス可シ  
 第五十四條 審事審問ヲ終リタル時ハ其報告書ヲ作り意見書ヲ添へ訴訟文書ト共ニ之ヲ理事ニ交付シ理事ハ意見書ヲ添へ之ヲ司令官ニ上申スヘシ  
 第六章 判決  
 第五十五條 司令官ハ軍法會議ヲ開ク可キ命令書ヲ判士長ニ下シ其謄本ヲ訴訟文書ト共ニ理事ニ下付シ理事ハ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ  
 第五十六條 軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士錄事各其席ニ著キタル後判士長被告人ヲ出廷セシム  
 判士長ハ先ツ被告人ノ官位勳等隊號職名氏名族籍年齢ヲ問ヒ訊問ヲ爲



スノ旨ヲ告示シ録事ヲシテ審事ノ報告書ヲ朗讀セシム  
其朗讀終リタルノ後判士長ハ被告事件ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ其  
訊問ヲ爲サシム

第五十七條 判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ令狀ヲ發スルコトヲ得  
判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得法廷ニ於テ罪ヲ  
犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サ  
シム可シ法廷ニ於テ證人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時ハ第五章ノ例ニ依  
ル

第五十八條 禁錮判上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應セサル時ハ之  
ヲ引致ス可シ但疾病若クハ正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサルコトヲ  
證明シタル時ハ判士長ハ其審判ヲ延期スルコトヲ得

第五十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人逃走シテ審判ノ日時ニ出廷  
セス若クハ逃走シテ召喚狀ヲ送達スルコトヲ得サル時ハ闕席裁判ヲ爲  
ス可シ

第六十條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受ケ審判ノ日時ニ出廷セ  
サル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第六十一條 數人共犯ノ審判ヲ爲ス時ハ被告人中闕席シタル者アリト雖

モ出廷シタル者ニ對シ審判ヲ爲ス可シ

第六十二條 判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後證人ヲ訊問シ若クハ判士ニ  
命シテ訊問セシム可シ

證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタ  
ル時ハ判士長ハ收禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ訊問  
ヲ爲サシメ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條 法廷ニ於テ更ニ檢證ノ處分ヲ要スルコトアル時ハ判士長ハ  
其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ共犯ヲ覺舉シタル時ハ判士長ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ  
若シ餘罪ヲ覺舉シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲ス可シ

但判士長ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第六十四條 被告人及ヒ証人ノ訊問終リタル時ハ判士長ハ更ニ被告人ニ  
對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ訊問終リタルノ旨ヲ告ケ被告  
人ヲ退廷セシム可シ

第六十五條 判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シテ之ヲ作  
リ判士長判士録事共ニ署名捺印シ判士長之ヲ理事ニ交付ス理事ハ訴訟

○第六類○治罪法○陸軍治罪法

文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申ス可シ

一有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ証憑及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ記ス  
二無罪ノ判決書ニハ被告ノ事件罪ト成ラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ犯  
罪ノ證憑備ハラサル時ハ其旨ヲ記ス

三免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタルコト  
法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス

四被告人ノ官位勳等隊號職名氏名族籍年齢住所及ヒ軍法會議判決ノ年  
月日ヲ記ス

第六十六條 司令官ハ左ニ記列スルノ事件ハ陸軍卿ニ上申シテ命ヲ請ヒ  
其他ハ之ヲ專決ス

但營所司令官ハ士官以上ノ犯罪ハ軍管司令官ニ上申ス可シ  
死刑

上長官以上ノ重罪輕罪  
士官ノ重罪

第六十七條 司令官其判決ヲ不適當ト思量スル時其專決ノ權アル事件ハ  
直ニ之ヲ再議セシムルコトヲ得  
其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ陸軍卿ニ上申ス可シ

第六十八條 陸軍卿ハ司令官ヨリ具申スル所ノ判決ヲ不適當ト思量スル  
時ハ直ニ司令官ニ下シテ之ヲ再議セシムルコトヲ得

陸軍卿ハ死刑並ニ上長官以上ノ重罪輕罪及ヒ士官ノ重罪ニ係ル者ハ上  
奏シテ命ヲ請フヘシ

第六十九條 宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士録事法廷ニ臨ミ被  
告人ヲ出廷セシメテ判士長其宣告ヲ爲ス可シ

第七十條 闕席裁判ニ係ル刑ノ宣告ハ軍法會議ノ門前ニ揭示ス可シ

第七十一條 臨戰若シハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ第六十六條ノ  
權限ニ拘ハラズ直ニ其宣告執行ノ命令ヲ下スヲ得

第七十二條 軍團師團旅團ノ長若シハ合圍ノ地ノ司令官ハ輕罪ノ刑ノ宣  
告ヲ受ケタル者ニ戴罪服務ヲ命スルヲ得

但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス  
其戴罪服務中功績アル者ハ司令官其刑ヲ減免スルヲ得

第七十三條 行刑ニ關スル方法ハ陸軍卿別ニ之ヲ定ム

第七十四條 臨戰若シハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ時宜ニ依リ此  
治罪法ノ條目ヲ省略執行セシムルヲ得

○第六類○治罪法○陸軍治罪法

○第二款 犯罪取扱手續並書式

明治十六年十月陸軍省乙第百二号達

罪犯取扱手續並書式左之通相定候條此旨相達候事

第一條 陸軍檢察官要塞司令官衛戍司令官諸隊長分遣隊長各所管ノ長官

監獄長陸軍治罪法ニ從ヒ檢察ノ處分ヲ終リタルキハ左ノ書類物品ヲ添

〔司令官ノ部下ニ屬セサル諸隊〕司令官ニ具申スヘシ

〔長ニ在テハ各其所管長官ノ經〕

一 被告人調書

二 被害届

三 証人調書

四 證據物品其他參考書類

五 鑑定書

六 檢證調書

七 書類及物品目錄書

被告人所屬ノ長官隊長檢察ノ處分ヲナシ具申テトキハ被告人ノ前

罰科素行調書ヲ添フヘシ

第二條 司令官被告事件ヲ審辨シ若クハ理事ノ意見ヲ問ヒ被告事件審問

ノ命令ヲ下スヘキ者トナスキハ命令書ヲ訴訟書類ト共ニ理事ニ下付スヘシ

裁判管轄ニアラサル者及ヒ審問ノ命令ヲ下スヘカラサル者ハ其書類ヲ返還スヘシ

審判ノ命令アリタルキハ理事ハ錄事ヲシテ其事件及ヒ所管隊號氏名等ヲ帖簿ニ登記セシメ之ヲ審事若クハ判士長ニ交付スヘシ

第三條 審事召喚狀ヲ發スル時被告人軍人軍屬ナルキハ其所屬ノ官廨若クハ本隊ニ移シテ送付ノ處分ヲ求ムヘシ若シ逃走等ノ恐れアルキハ護送ヲ求ムルヲ得但營外居住ノ者ニ係ルキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムルヲ得

其地ニ所屬官廨若クハ本隊アテサルキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムヘシ

召喚狀ヲ受ケ出廷シタル被告人ハ其召喚狀ヲ携ヘ之ヲ軍法會議ニ出スヘシ

第四條 審事勾引狀收禁狀ヲ發スルキハ憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシムヘシ憲兵卒之ヲ執行シ若クハ執行スル能ハサルキハ其旨ヲ審事ニ報告スヘシ

○第六類 ○治罪法 ○犯罪取扱手續並書式

第五條 被告人營内若クハ隊伍ニ在ルキハ憲兵卒ハ該隊長ニ頼リ勾引狀收禁狀ノ執行ヲ求ムヘシ

隊長ハ速ニ之ニ應セシムヘシ

被告人既ニ監倉ニ在ル者ナルキハ審事收禁狀ヲ監獄長ニ送付シ監獄長ハ速ニ其處分ヲ爲シ之ヲ審事ニ報告スヘシ

第六條 召喚狀勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ニ收禁狀ヲ發シ若クハ留置ヲ命シタルキハ監獄附屬ノ會計卒若クハ憲兵卒ヲシテ監獄ニ護送セシムルヲ得勾引狀ヲ以テ監獄ニ付スルキ又同シ

第七條 審事ハ罰金以下ノ刑ニ該ル者ト認ルキト雖モ其被告人遠隔ノ地ニ在ル軍人ナルキハ監獄ニ留置クヲ得

第八條 審事被告人ニ收禁留置ヲ命シ若クハ之ヲ解キタルキハ被告人所屬ノ官廨若クハ本隊及ヒ監獄ニ通報スヘシ奏任以上及ヒ帶勳者ニ係ルキハ理事ヲ經由シ司令官ニ上申スヘシ

司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ上申スヘシ但帶勳者ニ係ルキハ勳章年金褫奪及ヒ停止取扱手續第九條ニ依リ其處分ヲ爲スヘシ

第九條 證人鑑定人通事ヲ要スル時其証人鑑定人通事ト爲スヘキ者軍人軍屬ナルキハ其所屬ノ官廨若クハ本隊ニ呼出狀ヲ移シテ其出廷ヲ求ム

ヘシ但營外居住ノ者ニ係ルキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムルヲ得其地ニ所屬官廨若クハ本隊アラサルキハ直チニ本人ニ交付シ出廷セシムヘシ

第十條 呼出ニ應ジ出廷シタル者ハ其呼出狀ヲ携ヘ之ヲ軍法會議ニ出スヘシ  
第十條 審事ハ被告人所屬ノ官廨若クハ本隊ニ調書ヲ送り前罰科平素ノ行狀事實相違ノ有無等ヲ問フヘシ但所屬官廨本隊ノ具申ニ係リ事實明瞭ナルモノハ此限ニ在ラス

第十一條 司令官審問終結ノ上申ヲ受ケ其事件不問ニ付スヘキ者ト認ルキハ命令書ヲ理事ニ下付シ理事ハ錄事ト共ニ法廷ニ臨ミ之レヲ被告人ニ讀示スヘシ

第十二條 法廷ニ於テ審問ヲ要スル事件發覺スルキハ判士長審事ニ付シ其取調ヲ爲サシムルヲ得

第十三條 審事取調ヲ終リタルキハ更ニ報告書意見書ヲ出スヘシ  
第十三條 軍法會議ノ判決ハ多數ヲ以テ之ヲ決スヘシ

第十四條 被告人證人ノ陳述前ニ陳述シタル所ト異ナルキハ錄事其要領ヲ記錄シ理事ト共ニ署名捺印シ訴訟書類ニ添置シヘシ

第十五條 再議ノ命令ヲ受ケタル軍法會議ニ於テ事實明瞭ニシテ更ニ被

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

告人證人ノ訊問ヲ要セサル者トナスルハ直チニ判決ヲ爲スヲ得  
其宣告ハ命令ヲ下シタル陸軍卿若クハ司令官宣告書ヲ被告人所在ノ地  
ノ軍法會議ニ移レテ之ヲ爲サシムヘシ

第十六條 判士長令狀ヲ發シ若クハ之ヲ解キタルルハ第三條第四條第八  
條ノ例ニ從フ

第十七條 贓物犯人ノ手ニ在ルルハ被害者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付ス  
ヘシ

損害陸軍官署ニ係ルルハ請求ヲ待タズ返還賠償ノ處分ヲ爲スヘシ

第十八條 裁判宣告ノ時傍聽人ノ席ハ左ノ三區ニ別ツ

- 一 將官及ヒ同等官
- 二 上長官及ヒ士官
- 三 下士及ヒ卒

軍屬奏任ハ上長官士官ノ席ニ判任以下ハ下士卒ノ席ニ於テ傍聽セシム  
ヘシ

第十九條 無罪免訴若クハ罰金科料ノ宣告アリタルルハ理事直チニ犯人  
ヲ放免シ收禁留置ニ係リタル者ナルルハ其旨ヲ監獄ニ通報スヘシ  
禁錮拘留ノ宣告アリタルルハ監獄ニ交付スヘシ

懲役若クハ剝官ヲ附加スル禁錮若クハ普通刑法ニ依リ禁錮ニ處スル將  
校軍屬及ヒ懲治場ニ留置スル者ハ普通監獄則定ムル所ノ區別ニ從ヒ地  
方監獄ニ交付シ軍人軍屬ニ非サルルハ禁錮拘留ニ處スルルト雖モ又地  
方監獄ニ交付スヘシ

徒流禁獄ノ宣告アリタルルハ監獄ニ交付シ之ヲ司令官ニ具申シ司令官  
ハ之ヲ陸軍卿ニ上申スヘシ

前數項ノ處分ヲ爲スルハ裁判宣告書ノ謄本ヲ添フヘシ收禁ニ係ラサル  
囚人ヲ監獄ニ交付シ其他地方監獄ニ交付スルルハ第六條ニ從ヒ護送セ  
シムヘシ

第二十條 監視ニ付シタルルハ監獄長主刑滿限ノ後宣告書ノ謄本ヲ添ヘ  
犯人ヲ地方警察署ニ交付ス主刑ヲ免シテ止テ監視ニ付シタルルハ理事  
其處分ヲ爲スヘシ

第二十一條 有罪無罪ヲ問ハス裁判宣告アリタルルハ理事宣告書ノ謄本  
ヲ添ヘ本人所屬ノ官廳若クハ本隊ニ通報スヘシ  
罰金科料ノ宣告アリタルルハ理事期限内ニ之ヲ納完セシムヘシ其犯人  
營内居住ノ者ニ係ルルハ所屬隊長ニ照會シテ納完セシメ其監獄ニ在ル  
ルハ監獄長ニ照會シ監獄長之ヲ隊長ニ照會スヘシ

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

重罪及ヒ剝官ノ宣告アリタルキハ若クハ將校軍屬其他ノ官吏官職ヲ失フ刑ニ處セラレタルキハ理事裁判宣告書ノ謄本ヲ以テ所管ノ府縣ニ通報シ死刑ニ處セラレタル者ニ係ルキハ第三十條ニ照シ榜示公告スヘキヲテ照會スヘシ

第二十二條 罰金科料ヲ限内納完セサルキハ理事禁錮若クハ拘留ニ換ヘンコトヲ判士長ニ求メ言渡書ヲ作り録事ト共ニ法廷ニ臨ミ之ヲ言渡スヘシ

犯人遠隔ノハ地ニ在ルキ言渡書ヲ其所属ノ長官若クハ隊長監獄長ニ送致シ執行ヲ求ムヘシ長官隊長監獄長ハ其地ノ監倉若クハ監獄ニ於テ執行スヘシ禁錮拘留限内罰金科料ヲ納完シタルキハ理事放免ノ處分ヲ爲シ之ヲ判士長ニ通知シスヘシ長官隊長監獄長ノ執行シタル者ニ係ルキハ長官隊長監獄長之ヲ放免シ其金圓ヲ理事之ヲ判士長ニ通報スヘシ

第二十三條 罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人死去シタルキハ之ヲ徴收セス

第二十四條 條事ハ宣告ノ年月日及ヒ刑名刑期等ヲ遺漏ナク簿冊ニ登記スヘシ

第二十五條 死刑ヲ執行スルキハ犯人ヲ刑場ニ護送シ理事録事醫官之ニ

會同シ理事死刑ヲ執行スル旨ヲ犯人ニ告示シタル後小銃ヲ以テ之ヲ射殺ス其護送及ヒ執行ハ本人所属ノ隊兵一小隊ヲ以テシ隊外若クハ其地ニ所属ノ本隊アラサルキハ鎮臺歩兵一小隊ヲ以テ之ニ充ツ  
死刑執行ノ期日定ル時ハ理事隊メ之ヲ司令官ニ具申シ司令官前項ニ照シ隊兵出場ノ處分ヲ爲スヘシ

第二十六條 死刑ヲ行フキハ憲兵ヲシテ刑場ノ警戒ヲ爲サシメ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ許サス但理事ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第二十七條 死刑ノ執行畢リタルキハ録事其始末書ヲ作り會同ノ官吏ト

共ニ之ニ署名捺印シ軍法會議ニ納ムヘシ  
第二十八條 左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

元始祭 孝明天皇祭 紀元節

春季皇靈祭 仁孝天皇祭 神武天皇祭

六月大祓 秋季皇靈祭 神宮神嘗祭

天長節 後桃園天皇祭 新嘗祭

光格天皇祭 十二月大祓

第二十九條 死刑ニ處セラレタル者ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬

○六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

故舊請フ者アルキハ之ヲ下付ス

第三十條 死刑ヲ執行シタルキハ左ノ各所ニ榜示公告スヘシ

刑ヲ宣告シタル軍法會議ノ門前

犯罪地ノ揭示場

犯罪人原籍所在地ノ區戸長役所ノ門前

第三十一條 證人鑑定人通事旅費日當止宿料ヲ要求スルキハ刑法附則第

四十九條ニ從ヒ支給スヘシ

第三十二條 理事審事錄事ノ職務ハ理事ハ判決書ヲ作り會議ニ列シ且軍

法會議ニ係ル一切ノ庶務ヲ擔當シ審事ハ被告人證人ヲ訊問シ證據ヲ拾

收シ錄事ハ口供其他犯罪ニ關スル一切ノ書類ヲ作り及ヒ之ヲ保存スヘ

シ

第三十三條 司令官事變ニ際シ若クハ戰時ニ在テハ此手續及ヒ書式ヲ變

更省客執行セシムルヲ得

書式

第一號

被告人調書

府(縣)國區(郡)町(村)何番地住

華士族(平民)某長男(次男)弟  
宗門

兵種隊號(所管) 職官位 勳氏名

當何月何年何ヶ月

犯罪事實云云 問答體或ハ供述體

年月日襟袴袴下等ニ係ルキハ保存期限盜犯ナレハ贓物ノ存不存存セサレ

ハ其品ノ原價買入年月日品質等之ヲ詳記スヘシ但調書中ニ記載シ難キ事

項ハ之ヲ別紙ニ記スルモ妨ケナシ

第二號 年月日 被告人氏名印

証人調書

何某何々事件云々 問答體或ハ供述體

年月日 兵種隊號(所管) 証人職官氏名印

第三號

鑑定書

何々事件ニ付何々ノ鑑定ヲ命セラレタルニ由リ左ノ如ク鑑定ス

一何々手續診斷シタル處何々理由ナルニ付何々結果ナルヲ明白ナリ結果ヲ得サ

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式 下七百二十九

此他傷ノ輕重大小休業日數現場ノ景況將來治不治ノ徵候等ヲ詳記スル  
ヲ要ス

第四號 前罰科素行書  
年 月 日 鑑定人職官(職官ナキ者ハ住所)氏名印

一何年月日何々ノ所爲ニ依リ何年月日刑法何條ニ依リ何刑刑名ニ處セ  
ラル

一何年月日何々ノ所爲ニ依リ何罰懲罰科ニ處セラ  
一平素行狀云云  
年 月 日 調書ヲ作職官氏名印  
リタル者

第五號 被告事件具申書  
兵種隊號(所管) 職官 氏名  
右何々之件ニ付取調候處本犯及ヒ証人ノ陳述其他証據物件等別紙目錄ノ  
通リニ候間相當ノ御處分相成度候也  
年 月 日 職官 氏名印  
某鎮臺(營所)司令官氏名殿

第六號 審問命令書  
兵種隊號(所管) 職官 位 勳 氏名  
右之者何々名罪之件訴訟書類並証憑差廻候條審問可致候事  
年 月 日 某鎮臺(營所)司令官氏名印  
軍法會議中

第七號 召喚狀  
兵種隊號(所管) 職官 位 勳 氏名  
右ハ何々事件ニ付訊問之儀有之候條何月何日當軍法會議ニ出廷可致者也  
年 月 日 某鎮臺(營所)軍法會議  
審事(判士長官)氏名印

第八號 勾引狀  
兵種隊號(所管) 職官 位 勳 氏名  
右ハ何々事件訊問之儀有之候條當軍法會議ニ勾引スヘキ者也  
年 月 日 某鎮臺(營所)軍法會議  
審事(判士長官)氏名印  
但本人潜匿スル時家宅ヲ搜索ス可シ

某鎮臺(營所)軍法會議  
審事(判士長官)氏名印



第九號

收禁狀

兵種隊號(所管) 職官位勳氏名  
右何々事件禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ者ト認ルヲ以テ何所監倉ニ收禁スル者也  
但本人潛匿スル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

年 月 日

審事(判士長官)氏名印

第十號

收禁(留置)並ニ解收通報書

兵種隊號(所管) 職官位勳氏名  
右何々之件ニ付取調中月日收禁(留置)ノ處分ニ及ヒ(收禁留置致シ)候處月日解放(候間)此段及御通報候也

年 月 日

某鎮臺(營所)軍法會議  
審事(判士長官)氏名印

何官廨(何隊)

御 中

第十一號

收禁並解放上申書

兵種隊號(所管) 職官位勳氏名  
右何々之件ニ付取調中月日收禁致シ(收禁候處)月日解放致シ(候間)此段及上申候也

年 月 日

審事(判士長官)氏名印

某鎮臺(營所)司令官氏名殿

第十二號

共犯發覺上申書

兵種隊號(所管) 職官位勳氏名  
右ハ兵種隊號(所管)職官氏名被告事件取調候處其共犯ナルヲ覺舉致シ候處何分ノ御下命有之度此段及上申候也

年 月 日

審事(判士長官)氏名印

某鎮臺(營所)司令官氏名殿

第十三號

事實前罰科素行照會書

兵種隊號(所管) 職官氏名

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

右被告事件取調候處刑紙訊問書之通致供述候事實相違無之哉(且前罰科及平素ノ行狀等)御申越有之度此段及御照會候也

年月日

何官廨(何隊)

御中

某鎮臺(營所)軍法會議

審事氏名印

第十四號

被告人訊問書

本管、

第一號書

式ニ同シ

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

年齡

問其方之本官等ハ前ニ示シタル通ニ相違ナキヤ

答然リ

問其方ハ前ニ罪ヲ犯シ刑法ノ處分ヲ受ケシコアリヤ

答云々

問勳章從軍記章ヲ賜リタルコアリヤ

答云々

問何々犯罪事實

答云々

問、

答、

一證憑物件ヲ示シ

問此品々ハ何々ニ用ヒシ者ナリヤ又ハ某所ニテ盜ミ取リシ物ナリヤ(其方ノ所有ナリヤ)、

答、

問右陳述ノ外申立ツヘキコナキヤ

答、

年月日

氏名印

右被告人某ニ讀聞ガセタル處陳述シタル所ニ相違ナキ旨相答署名捺印セシニヨリ本官等左ニ署名捺印スル者也

審事氏名印  
錄事氏名印

被告人其陳述ヲ増減變更スヘキコナキ申立タル所其陳述ヲ増減(變更)ヘキコナキ申立タルニ付更ニ其問答ヲ記載スル左ノ如シ

問、  
答、

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

以下總テ書式ニ同シ

第十五號

檢証調書

某何々事件ニ付年月日日時檢証ノ爲メ何所家屋ニ到リ之ヲ檢スルニ其家屋ハ何々造等而何方ノ墻壁ハ何形破壞シ何器ヲ以テ之ヲ毀テタル者ノ如ク以テ人ノ出入ヲ容易ナラシムヘシ而足跡泥痕ヲ留メ何所ヨリ何室ニ連接スルニヨリ立會人其他何々ト共ニ其室ニ入り之ヲ查スルニ何々ノ景況立會人由此觀之其盜ハ何々ノ墻壁ヲ破壞シ之ヨリ入り又ハ他ヨリ陳述等ルヲ明瞭ナリ因テ何室ニ於テ見出シタル證據物件何々ヲ押収シ其受領證ヲ何々ニ付シ何時ニ檢証處分ヲ終リ本官等署名捺印スル者也

年月日

審事氏名印

錄事氏名印

第十六號

報告書

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者被告事件審問ヲ遂ケ候處某年月日時兵營ヲ脱シ何町古着商ニ官給

品ヲ賣リ其代金若干ヲ旅費ニ充テ某所ニ赴キ某日時某所ニ於テ警察官ニ捕ヘラル自首或又某年月日晝或ハ夜或ハ二人以某所ニ入り門戸墻壁ヲ踰テ開何々ヲ竊ミ取リ又某年月日哨兵ニ對シ口論ヲ爲スモ暴行ヲ爲サ、キ等ル旨被告人陳述スト雖証人氏名ノ陳述又ヒ何々ノ証ニ依ルニ暴行ヲ爲シタルヲ明瞭ナリ因テ訴訟書類証憑相添此段報告候也

年月日

審事氏名印

第十七號

審事意見書

職官氏名印

右之者被告事件別紙報告書之通ニ有之其何々ノ所爲ハ陸軍刑法第何條ニ該リ何々ノ所爲ハ普通刑法第何條ニ該リ何々ノ所爲ハ何々ノ證憑ニ依レハ何々シタル者ナリト雖モ何々ナルヲ以テ刑法ニ問フ可カラサル者(又何々ノ所爲ハ確定裁判ヲ經或ハ法律ニ於テ其罪ヲ全免ス可キ者等)トス此段意見申陳候也

年月日

審事氏名印

第十八號

理事意見書

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

下七百三十七

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者訴訟書類ニ依リ之ヲ審按スル逃亡六日ヲ過キ緝捕セラル、ハ陸軍刑法第何條ニ該シ何々ヲ竊取スルハ普通刑法第何條ニ該ス可キモノトス依テ判決ニ付シ(何々ノ所爲ハ何々ニ因リ罪トナラス或ハ何年月ヲ經ルヲ以テ公訴期滿免除ニ屬ス或ハ確定裁判ヲ經或ハ法律ニ於テ其罪ヲ全免スヘキ者等トス依テ免訴置ニ係ルハ且放免)可然此段意見上申候也

年月日

理事氏名印

某鎮臺(營所)司令官氏名殿

第十九號

判決命令書

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

右之者何々之件別紙訴訟書類並ニ証憑差廻シ候條判決可致候事

年月日

某鎮臺(營所)司令官氏名印

軍法會議中

第二十號

證人呼出狀 鑑定人通事呼出狀 亦之ニ準ス

兵種隊號(所管)

職官氏名

何々 被告人住 何何事件ニ付年月日時證人トシテ當軍法會議ニ出廷可致者也

正當事故ヲ證明セスシテ呼出ニ應セサル時ハ法律ニ依リ罰金ヲ科シ又勾引スルヲアルヘシ

證人委任以下ニ係ルハ可致ヲ可有之ト爲シ職官氏名殿宛ト爲ス

某鎮臺(營所)軍法會議

審事(理事)氏名印

第二十一號

證人訊問書

兵種隊號(所管)

職官

年 齡

問兵種隊號(所管)本管等ハ前ニ示シタル通相違ナキヤ

答然リ

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

下七百三十九

問事實、、、

證據物件アレハ之ヲ示シ

問、、、

答、、、

以下被告人訊問書ニ準ス

第二十二號

證人罰金言渡書 鑑定人通事

之ニ準ス

本管、、、

第一號書

式ニ同シ

兵種隊號(所管)

職官

位勳

氏名

年齡

右年月日某被告事件ニ付證人トシテ出廷ヲ命シタル所故ナク呼出ニ應セ  
ス因テ陸軍治罪法第五十一號 陳述ヲ肯セサルハ普通ニ依リ罰金何圓ニ  
處ス

某鎮臺(營所)軍法會議

審事判士長官(氏名)印

年月日

第二十三號

免訴命令書

兵種隊號(所管)

職官

位勳

氏名

右之者何々ノ件罪トナラス(法律ニ於テ其罪ヲ全免ス)(期滿免除ヲ經)(大  
赦)等云々因テ免訴收禁留置ニ 且放免スル者ナリ

某鎮臺(營所)司令官(氏名)印

年月日

第二十四號

犯人交付添書

兵種隊號(所管)

職官

氏名

右之者別紙宣告書之通處分相成候間本犯及御交付候也

某鎮臺(營所)軍法會議

理事

氏名

印

年月日

監獄長(氏名)殿

第二十五號

判決書即宣告書 無罪免訴判決

書之ニ準ス

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

本管、  
第一号書  
兵種隊號(所管)

職官位勳氏名

年 齡

右被告(宣告書其方)ハ何々(犯罪)何々(證據)ニ依リ明瞭ナリ(又何々陳述)スト  
雖モ據ニ依レバ何々ノ所爲アリタルヲ明瞭ナリトス(之ヲ法律ニ照スニ  
何々ニ揭クル所ノ罪ヲ犯シタル者因テ同條ニ依リ何刑ニ處ス)剝官若ク  
ハ罰金ヲ附加ス(沒收品)何々法律ニ於テ禁制シタル物件ナルヲ以テ之ヲ  
沒收ス(贓物犯人ノ手)何々ハ盜品ニシテ犯人ノ手ニ在ルヲ以テ徵收シ  
テ被害者ニ還付ス(損害官物ニ)何々ノ損害ハ金若干ヲ賠償スヘシ(沒收  
等ノ事項ハ別項ニ記載スルモ妨ケナシ)

某鎮臺(營所)軍法會議

年 月 日

判士長官氏名印  
判士官氏名印  
判士官氏名印

第二十六號

裁判通報及罰金科料納完照會書

兵種隊號(所管)

職官氏名

判士官氏名印  
理事氏名印  
錄事氏名印

右之者別紙宣告書之通處分相成候間此段及御通報候(營内居住ノ者ニシテ  
ハ一月内ニ罰金納完セシメ)科料ナ(科料ナ)十日内ニ科料納完セシメ候御取計  
相成度此段及御照會候也

某鎮臺(營所)軍法會議

年 月 日

理事氏名印

何官廨(何隊)

御 中

下士上等卒及軍屬禁錮ノ刑追テ本犯ハ陸軍刑法第三十條(普通刑法第三  
十三條)ニ依リ官職ヲ失フハ(追テ本犯ハ陸軍刑法第三十條(普通刑法第三  
十三條)ニ依リ官職ヲ失フ候間爲念此段申添候也  
第二十七號

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

重罪及剝官ヲ附加シ若シハ官職ヲ失フ刑ニ處セラレタルハ府縣へ通  
報書

本管、  
第一號書  
式ニ同シ  
兵種隊號(所管)

職官 位 勳 氏 名

右之者別紙裁判宣告書之通何日致處分候條此段及御通知候也  
某鎮臺(營所)軍法會議印

府(縣)

御 中

第二十八號

罰金科料ヲ禁錮ニ換ユル言渡書

兵種隊號(所管)

職官 勳 位 氏 名

右之者何々之罪ヲ犯シタルニ依リ年月日若干ノ罰金科料申付ル處一月十日  
日)ヲ過ルモ未タ納完セサルヲ以テ陸軍刑法第二十七條ニ依リ普通刑法  
第二十七條第三十條附加ノ罰金ナルハ、照シ輕禁錮(拘留)何日ニ換フ  
第四十二條ヲ加フ

ル者也

某鎮臺(營所)軍法會議

判 士 長 官 氏 名 印

年 月 日

第二十九號

死刑執行始末書

本管、  
第一號書

式ニ同シ

兵種隊號(所管)

職官 位 勳 氏 名  
年 齡

右之者年月日何所ニ於テ何罪ニヨリ死刑ヲ執行スルニヨリ臨場檢視シ其  
始末ヲ錄スル左ノ如シ

一 何時何分某軍法會議ニ於テ宣告ヲ爲シ何時何分何隊犯人ヲ護送シ刑場  
ニ來ル

一 迎事某犯人ニ死刑ヲ執行スル旨ヲ告ケ等外吏ニ命シ何々ヲシテ其準備  
ヲ爲サシム須臾ニシテ準備整フヲ報ス理事ハ之ヲ小隊長ニ告ク小隊  
長射子ニ令ス射キ進ンテ何歩ノ地ニ立 或ハ一發兩眉ノ間ヲ洞ス醫官親  
接反覆熟視絶命ヲ報ス理事更ニ檢査シ之ヲ隊長ニ告ケ隊長整列ヲ解キ

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

理事何々ニ命シ埋葬ノ手續ヲ爲サシノ親屬某ニ下付ス 何時執行處分全ク畢ル

年月日

醫官 氏名 印  
理事 氏名 印  
錄事 氏名 印

第三十號

死刑揭示

本管、第一號書

兵種隊號(所管)

職官位勳氏名 年 齡

宣告全文ヲ揭ク、右之通告候ニ付公告スル者也

年月日

某鎮臺(營所)軍法會議

第三十一號

人相書

丈	顔	色	頭	髮	眼	眉	鼻	口	耳	齒	音	痘	疵	鬚髯ノ有無	其他特徴

本管、第一號書

兵種隊號(所管)

氏名 年 齡

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式



長所
父母妻子
逃走ノ際着用衣服
同上ノ際持去物品
同上ノ際殘置ノ物品
犯罪事件ノ概略

他ニ處分ヲ求ムル時ト管下ニ達スル時トニ依リ別紙ニ照シテ之ヲ記入ス

(別紙)

他ニ處分  
ヲ求ムル  
時

右之者何々ノ犯罪有之候處所在分明ナラサルニ依リ(或ハ何獄何所  
へ收禁拘引中何年月何日何)搜索ノ上逮捕ノ御處分有之度候也  
日何時何分逃走候ニ付

明治年月日

某鎮臺(營所)司令官氏名印

某鎮臺(營所)司令官  
某控訴裁判所檢事長 氏名殿

管下ニ達  
スル時

右之者何々ノ犯罪有之所在分明ナラサルニ依リ(或ハ何獄何  
引中何年月何日何)他ヨリ請求ニ係ル時ハ(搜索)嚴密搜索  
時何分逃走候ニ付)ノ上逮捕方囑托有之候ニ付  
ヲ遂ケ見當次第逮捕スヘキ者也

但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ搜索スヘシ

明治年月日

某鎮臺(營所)司令官氏名印

第三十三號 判士長以下列席圖

律師	○	○	○
書記	○	○	○
控訴人	○	○	○
辯護人	○	○	○
證人	○	○	○
外取	○	○	○
證人	○	○	○
罪囚	○	○	○
證人	○	○	○

此位置ハ將校下  
士等ヲ分シテ

○第六類○治罪法○犯罪取扱手續並書式

下七百四十九

上ニ掲クル所ノ書式ハ二三概略ノ例ヲ示ス者ニシテ凡百文書ノ式ヲ枚舉シ盡スモノニ非ル也譬ヘハ軍人ノ例ヲ舉ケテ平民ニ及ハス證人ヲ列シテ鑑定人通事ヲ列セシ審事ニ關スルモノヲ掲ケテ判士長檢察官ニ關スルモノヲ掲ケス若クハ檢察官命スル所ノ醫師ノ鑑定書ヲ舉ケテ豫審若クハ判決ニ於テ命スル鑑定書ヲ示サス竊盜ノ檢証書ヲ掲ケテ其他ニ及ハス照會書通報書ノ如キモ甲ヲ舉ケ乙ヲ省クノ類是ナリ况ヤ變態百出ノ事物數行書式ノ能ク盡ス所ニ非ルハ固ヨリ論ヲ待タサルニ於テチヤ夫ノ範圍ノ中ニ拘々シ爲メニ行文澁滯シ若クハ事務煩雜ニ失スル若キハ則書式ヲ設クル所以ノ旨趣ニ非ルヲ以テ實際事ニ當ル者類ヲ推シ例ニ從ヒ簡易明瞭ヲ主トシ詳略宜キヲ得セシムヘシ

○第三款 陸軍監獄則

明治十六年十月陸軍省乙第百九號達

陸軍監獄則別冊之通相定候條此旨相達候事

- 第一章 總則
- 第二章 監署ノ規程
- 第三章 監獄ノ構造

役法及ヒ工錢  
通信接見

第六章 賞譽  
懲罰

陸軍監獄則

第一章 總則

第一條 陸軍監獄ヲ別テ左ノ三種ト爲ス

- 一 監倉 未決者ヲ拘禁スル所トス
  - 二 禁錮場 禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス
  - 三 拘留場 拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スル所トス
- 又各兵營内及ヒ憲兵部ニ留置場ヲ置キ未決者ヲ一時留置スル所トス但時宜ニ依リ拘留ノ刑ニ處セラレタル者ヲ拘留スルヲ得

第二條 監獄ハ軍法會議所在ノ地ニ置キ鎮臺ニ在テハ軍管司令官營所ニ在テハ營所司令官ニ屬ス

第三條 監獄ハ會計一等軍吏ヲ以テ監獄長トシ會計二三等軍吏ヲ以テ監獄副長トシ會計書記ヲ以テ看守長及ヒ書記トシ會計卒ヲ以テ看守トシ其他二三等軍醫看護長看病卒及ヒ押丁ヲ置ク

○第六類 ○治罪法 ○陸軍監獄則

第四條 軍管司令官及ヒ營所司令官ハ臨時監獄ヲ巡閱スヘシ

理事及ヒ審事モ亦臨時監倉ヲ巡閱スヘシ

第五條 在監人ト稱スルハ未決已決ノ者ヲ謂フ

第六條 十六歳未滿六十歳以上ノ者及ヒ婦女ヲ入監スルコトアル時ハ普通

監獄則ノ例ニ照シテ之ヲ區處スヘシ

第二章 監署ノ規程

第七條 在監人ハ左ノ區別ニ從ヒ其監房ヲ別異ス

但已決囚ハ各刑名ニ從ヒ仍ホ其監房ヲ別異スヘシ

一 准士官以上及ヒ同等ノ軍屬

二 下士及ヒ同等ノ軍屬

三 諸卒諸生徒等外以下ノ軍屬

第八條 在監人中能ク獄則ヲ守ル者ヲ傳告者誘工者ト爲ス傳告者ハ官吏

ノ命令ヲ在監人ニ傳ヘ誘工者ハ工場ニ在テ服役者ヲ勸誘セシム但傳告

者誘工者ハ滿六月以上之ヲ繼續セシムルコトヲ得ス傳告者誘工者ハ私ニ

在監人ヲ使役シ若クハ凌辱スル所爲アルヲ許サス

第九條 刑期滿限ノ者ヲ解放スルハ滿期ノ翌日午前第十時ヲ過クヘカラ

ス

第十條 死刑ニ處セラレシル者若クハ在監中死去スル者ノ所有ニ屬スル

貨物ハ親屬若クハ故舊ニ下付スヘシ

親屬故舊遠隔ノ地ニ在リ許多ノ遞送費ヲ要スル時ハ販賣シテ其代價ヲ

送致スルコトヲ得遞送ノ費用ハ領収スル者之ヲ償フヘシ其貨物若クハ代

價ヲ受クヘキ親屬故舊ナキトキハ之ヲ沒收ス

第十一條 在監人病死スル者アルトキ其遺骸ハ親屬若クハ故舊ノ請フ者

ニ下付ス若シ請フ者ナキトキハ之ヲ假葬シ其上ニ氏名標ヲ建ツヘシ但

下士以下別ニ定ムル所ノ規則ニ依リ處分スヘキ者ハ其規則ニ從フヘシ

第十二條 在監人逃走スル者アル時領置ノ貨物ハ第十條ノ例ニ依テ處分

スヘシ但沒收ハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經ルノ後ニ非レハ之ヲ處分ス

ルコトヲ得ス

營内居住ノ者ニ於テハ之ヲ本隊ニ送致スヘシ

第十三條 監獄ノ近傍ヨリ發火シテ罹災ノ虞アルトキハ獄吏其形勢ヲ量

リ在監人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避ケシムヘシ

水火風震其他激甚ナル變災ニ際シ在監人ヲ押送スルノ邊ナキ時ハ要犯

疑獄ニ係ル者ヲ除クノ外一時解放スルコトヲ得

第十四條 未決者ニ其親屬故舊ヨリ書籍用紙衣服寢具若クハ飲食物ヲ贈

○第六類 ○治罪法 ○陸軍監獄則

ラント請フ時ハ之ヲ許シ酒類烟草其他毒生ニ害アル者ハ之ヲ許サス但書籍ハ内務書及ヒ操典若クハ修身營業ニ必用ナル者ニ限り飲食物ハ炊烹ヲ要セサル者ニシテ一人一食ノ量ニ限ルヘシ

第十五條 已決者ニハ前條ニ掲クル書籍及ヒ用紙ノ外差入品ヲ許サス

第三章 監獄ノ構造

第十六條 監倉禁錮場一區域内ニ在ル者ハ牆壁ヲ以テ之ヲ區畫ス

拘留場ハ禁錮場ノ監房ヲ分テ之ニ充ツ

第十七條 病室ハ監獄内ニ設ケ傳染病室ハ之ヲ區別ス

閤室ハ禁錮場内ニ設ク其室ハ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セシメサルヲ要ス

第十八條 甲ノ監房ニ在ル者ト乙ノ監房ニ在ル者ト彼此交談シ又ハ物件ヲ交通スルノ便ヲ得サラシムヘシ

第十九條 接見室ハ監獄内ニ設ケ其壁面ニ方三尺ノ口ヲ開キ之レニ縱横ノ格子ヲ嵌メ在監人ハ格子内ニ立タシメ外人ハ格子外ノ柵欄ニ倚ラシム其柵欄ハ格子ヨリ三尺ヲ距ルヘシ

第四章 役法及ヒ工錢

第二十條 定役ニ服スル者ノ作業ハ每囚一日ノ科程ヲ定メ服役セシム若

シ病後ノ疲勞等ニ因リ勞作ニ堪ヘサル者ハ其体力ニ應ジ科程ヲ寬恕ス

第二十一條 左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス

父母ノ喪ニ遭フ者亦一日免役ス

一月一日

一月二日

元始祭

孝明天皇祭

紀元節

春季皇靈祭

神武天皇祭

秋季皇靈祭

神嘗祭

天長節

漸嘗祭

十二月三十一日

第二十二條 定役ニ服スル囚徒現役一百日ヲ經レハ始メテ各自ノ工錢ヲ料定シ之ヲ十分シテ其八分ヲ監署ニ収メ其二分ヲ與フ

○第六類○治罪法○陸軍監獄則

定役ニ服セサル囚徒及ヒ未決者ニシテ作業スル者ノ工錢ハ十分シテ其三分ヲ監署ニ収メ其七分ヲ與フ定役ニ服スル囚徒當日ノ科程ヲ畢テ仍ホ作業スル者科程外ノ工錢亦之ニ準ス

第二十三條 服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期一百日以内ハ工錢ヲ給與セズ

第二十四條 在監人ニ與フヘキ工錢ハ監署ニ領置シ毎月ノ首ニ於テ其前月ノ總計金額ヲ本人ニ知ラシムヘシ

第二十五條 各種ノ工錢ハ其他普通ノ傭工錢ヲ準トシ各自ノ技能ニ應ジテ之ヲ定ムヘシ

第二十六條 監署ニ領置ノ工錢ハ本人ノ請ヒニ由リ親屬ニ贈與スルコトヲ許シ又必用ノ物品及ヒ第十四條ノ書物若クハ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得

第二十七條 在監人死去スル時其領置ノ工錢ハ第十條ノ例ニ照シ處分スヘシ

第二十八條 在監人逃走スル時其領置ノ工錢已決囚ニ係ル者ハ之ヲ沒收スヘシ

未決者及ヒ定役ニ服セサル囚徒若クハ定役ニ服スル者ト雖モ科程外ノ

勞作ニ依リテ得タル工錢ハ親屬ニ下付シ親屬ナキ時ハ之ヲ沒收ス營内居住ノ者ニ在テハ第十二條ノ例ニ照シテ處分ス可シ

第五章 通信接見

第二十九條 已決囚其親屬故舊ニ書信ヲ贈ルハ六月間ニ一次トシ一次一通ニ過ルコトヲ得ス但官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ若クハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ司獄官吏必用ト認ル時ハ此限ニ在ラス

第三十條 未決者ニ係ル信書ハ定限ナシ但審事若クハ理事ノ閱檢ヲ經ルニ非レハ贈答セシムルコトヲ得ス

第三十一條 在監人ノ發スル信書ハ監獄長之ヲ閱檢スヘシ若シ書中忌諱ニ涉ル等ノ文意アル時ハ通信スルコトヲ許サズ

第三十二條 外人ヨリ在監人ニ贈リ來ル信書ハ監獄長之ヲ閱檢シ適正ノ事項ヲ陳ヘ若クハ遷善ノ諭示ヲ主トスル者ニ限り之ヲ本人ニ附與ス若シ書中忌諱ニ涉リ若クハ在監人ノ改悛ヲ妨ル者ト認ルトキハ之ヲ附與スヘカラス親屬故舊ノ信書ハ監獄署ニ宛差出サシムヘシ

第三十三條 在監人ニ接見セント請フ者アル時ハ監獄長先ツ之ニ面接シテ族籍職業氏名等ヲ訊ヒ其緣由旨趣ヲ詳悉シ己ムヲ得サルノ事狀アリテ形狀ノ疑フ可キコトナキトキハ之ヲ許シ看守長看守並ヒ莅テ面會セ

シム但未決者ニ係ルハ監獄長之ヲ理事若クハ審事ニ照會シテ之ヲ許  
否スヘシ

面會ノ時間ハ三十分時ヲ過ルヲ得ス若シ最初陳述シタル面會ヲ請フ  
ノ旨趣ニ違ヒタル談話ヲ爲ス時ハ直チニ之ヲ停止ス

第三十四條 死刑執行ノ以前又ハ徒流禁獄ノ刑ヲ受ケタル囚徒ヲ集治監  
ニ押送スル以前親屬故舊其囚徒ニ面會セント請フキハ前條ノ規則ニ從  
ヒ面會セシム但其時間ハ五十分時ヲ過ルヲ得ス

第六章 賞譽

第三十五條 己決囚獄則チ謹守シ且改悛ノ狀著キ者ト監獄長ニ於テ認ム  
ルキハ之ヲ賞譽スヘシ

第三十六條 賞譽セシ者ニハ賞譽セシ毎ニ之ヲ表スル爲メ獄衣ノ左袖肩  
臂間ノ表面ニ方二寸ノ藍色布ヲ縫著スヘシ

第三十七條 賞表ハ特赦ヲ具狀スルノ參考ト爲スヲ得

第三十八條 賞表ヲ得タル者ニハ二月間ニ一次親屬故舊ニ接見及ヒ通信  
スルヲ許ス

第三十九條 己決囚在監人ノ逃走ヲ密告若クハ捕獲シ或ハ監獄ニ罹ル水  
火災ヲ防禦シ或ハ人命ヲ救援スル者アルハ金貳拾五錢以下ヲ賞與ス

其賞金ハ監署ニ領置シ本人ノ請求アルトキハ必用品若クハ食物ヲ購ヒ  
之ヲ給スヘシ

第四十條 未決監ニ在ル者前條ノ勞動アル時ハ之ヲ録シテ軍法會議ノ參  
考ニ供ス可シ

第七章 懲罰

第四十一條 己決囚此獄則其他獄内若クハ服役ノ爲メニ設ル所ノ規則ヲ  
犯ス時ハ其輕重ヲ量リ左ノ罰例ニ從テ處分ス

一 絕信 親屬故舊ト通信接見ヲ絶ス

二 屏禁 晝夜他ノ監房若クハ工場ト隔絶シタル監房ニ獨居セシメ尙ホ  
座作ノ役ヲ科ス

三 減食 常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

四 闔室 闔室ニ獨居セシメ常食ノ半若クハ其三分ノ二ヲ減シ鹽湯二品  
ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ寢具ヲ禁ス

第四十二條 絕信屏禁ハ有限若クハ無限ト爲シ減食闔室ハ七晝夜ヲ限リ  
トス減食闔室七晝夜ニ滿ルモ改悛ノ狀ナキ時ハ一旦之ヲ免シ更ニ之ヲ  
科スルコトヲ得

第四十三條 未決者及ヒ拘留ノ刑ヲ受ケシ者教令ニ順ハス或ハ同監ノ者

○第六類○治罪法○陸軍監獄則

ヲ煽惑シ其他規則ヲ犯ス時ハ所犯ノ輕重ヲ量リ第四十一條ニ準據シ減食スルヲ得

第四十四條 賞表ヲ有スル者處罰ヲ受クル時ハ賞表一個若クハ數個ヲ褫奪ス

第四十五條 減食若クハ關室ノ罰ニ處ス可キ者アル時ハ醫官ヲシテ診視セシメ身軀ニ妨ナキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ

第四十六條 罰則ニ處セラレザル者改悛ノ狀ヲ表スル時ハ之ヲ免スルヲ得

○第四款 陸軍監獄署官員服務概則

明治十六年十月陸軍省乙第百十号達

陸軍監獄署官員服務概則別冊之通相定候條此旨相達候事

但明治九年九月達第百四拾號達ハ廢止ト可相心得事

陸軍監獄署官員服務概則

第一條 新ニ入監スル者アル時ハ監獄長先ツ拘引狀收禁狀裁判宣告書等ノ文書ヲ查閱シテ之ヲ領シ其領収ノ証ヲ引致シ來ル者ニ交付ス其文書ナキ者ハ之ヲ入監スヘカラス  
其入監者ノ名籍ハ軍法會議ノ報知ヲ得テ書記ヲシテ其要項ヲ錄セシム

第一條 監房ニ入ル、物品ハ監獄長之ヲ檢査シ其危險ノ慮アル者ハ之ヲ禁スヘシ

第三條 定役ニ服セサル囚徒ト雖モ監獄長之ヲ勸誘シ自ラ勞作セント請フニ至ラシムルヲ要ス其工業ノ種別ヲ定ムルハ監獄長ノ指示ニ依ル

第四條 監獄長ハ不時ニ監房ノ内外ヲ巡視シ或ハ物件ヲ查閱スヘシ

第五條 監獄長ハ看守長及看守ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ錄セシメ以テ賞罰ヲ行フノ參考ト爲スヘシ

賞罰ヲ行ヒタルトギハ第四十四條ノ例ニ依リ在監人ニ示スヘシ  
賞表ヲ與ヘタル時ハ賞簿ニ其氏名及ヒ賞詞ヲ記載シ若シ褫奪シタル時ハ之ヲ刪除スヘシ

第六條 在監人滿刑ノ者アル時監獄長ハ其本人ノ所管ヘ其旨ヲ滿期三日前ニ通報スヘシ

第七條 共犯ニ係ル未決者ハ其監房ヲ別異シ談話通聲ヲ禁シ法庭ニ押送スル時亦同行セシムルヲ得ス但犯狀ニ依リ之ヲ別異セサルヲ得

第八條 要犯疑獄ニ係ル者ヲ拘禁スル監倉ニ於テハ其氏名ヲ呼ハス番號ヲ以テ之ニ換フヘシ其着衣ノ外襟ニ白布ヲ縫著シ番號ヲ墨書シ監房ヲ出入スル毎ニ皂布ヲ以テ覆面シ當眼ノ所ニ小孔ヲ穿テ共犯者ヲシテ共

○第六類○治罪法○陸軍監獄署官員服務概則 下七百六十一

ニ拘禁ノ身タルヲ窺探スルヲ得サラシム

第九條 前二條ハ理事若クハ審事ノ報ヲ得テ監獄長其指揮ヲナスヘシ

第十條 入監人ノ携有スル財物若クハ物品ハ看守長悉ク點檢シテ其名數ヲ簿冊ニ記載シ監獄長證印シテ之ヲ領置シ解放ノ時還附スヘシ但點檢ノ際隱匿スル貨物ハ之ヲ沒収ス

其領置ノ貨物ヲ以テ親屬ヲ扶助シ其他正當ノ費用ニ充ント請フ時ハ之ヲ許ス未決者ニ係ルトキハ理事審事ニ照會シテ之ヲ行フ

第十一條 看守長ハ入監者ノ全身ヲ檢査シ利器其他ノ物件ヲ夾帶スルヲ拒クヘシ

第十二條 看守長ハ總テ在監人ノ姓名ヲ簿冊ニ記載シ之レニ番號ヲ付シ監房ノ出入ヲ明瞭ニスヘシ

第十三條 看守長ハ日夜監房ノ内外ヲ巡視シ或ハ物件ヲ査閱スヘシ

第十四條 看守長ハ毎日終役ノ際工業ノ諸器械ヲ牒簿ニ照シテ點檢ス可シ

第十五條 看守長書記ハ月末毎ニ諸工業ニ關スル需用品ノ檢査ヲ遂ケ其費消高及殘餘等ヲ監獄長ニ申報ス可シ

第十六條 在監人ヲ軍法會議其他ニ護送スル時看守長ハ監獄長ノ達ヲ受

ケ看守ヲシテ護送セシム若シ病囚アレハ醫官ノ診斷ニ依リ乗車セシムルヲアリ

第十七條 在監人ヲ他監ニ移ス時ハ其名籍若クハ處刑ノ宣告其他必用ノ文書及領置ノ貨物ヲ具シ看守長ヲシテ其引渡シヲナサシム

第十八條 毎日囚徒ヲシテ役ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及看守點檢ス可シ還房セシムル時亦同シ

第十九條 看守長ハ日々製造品ノ檢査ヲナシ翌日ニ至リ其物品ヲ監獄長ニ差出スヘシ

第二十條 看守長ハ被服寢具ノ欠乏アルトキハ監獄長ニ請求シ之ヲ受取リ囚徒ノ姓名及ヒ被服ノ番號ヲ牒簿ニ記載シテ貸與スヘシ

第二十一條 書記ハ日々遺漏ナク己決未決ノ名籍ヲ滿刑放免ノ期日ヲ計算シ報告書ヲ作り監獄長ニ差出スヘシ又記録ヲ明瞭ニシ文書ノ錯雜ナカラシメンヲ要ス

第二十二條 書記ハ毎月囚徒ノ製造セル物品ノ數量價位等ヲ牒簿ニ詳記シ監獄長ノ閱檢ヲ受クヘシ

第二十三條 看守ハ晝夜間斷ナク獄舍内外ヲ巡視シ破牢越獄等ノナガラシメンヲ要ス又獄則ニ違フ者アル時ハ其旨ヲ看守長ニ申告スヘシ

○第六類○治罪法○陸軍監獄署官員服務概則



第二十四條 在監人法庭ニ出ル時及運動入浴其他都テ獄舎ヲ出入スル時ハ看守之ヲ監視シ毫モ怠慢スヘカラス

第二十五條 看守ハ工役ノ督責ニ任シ日日ノ製造高ヲ牒簿ニ記シ調印シテ其物品ト共ニ看守長ノ檢印ヲ受クヘシ

第二十六條 囚徒ノ製造品賣却代價ノ中ヨリ器械費及需用費等ヲ引去リ其利益金ハ毎月官納スヘシ

第二十七條 在監人ヨリ發スル信書ハ必ス書信紙ヲ用ヒシメ司獄官吏之ヲ緘シ封皮ニ其受領スヘキ者ノ住所氏名ヲ書シ某陸軍監獄署ト記シ之ヲ遞送ス但郵便稅ハ自辨セシム其自辨スル資力ナキ者ニハ之ヲ許サス

第二十八條 門ノ開閉ハ日出日沒タルヘシ其鑰ヲ宿直官吏之ヲ領置シ開門ノ時時門番ヘ授クヘシ

第二十九條 門ノ通行ハ陸軍ノ徽章アル者ノ外ハ姓名及其事由ヲ問ヒ之ヲ許ス已決未決監ノ門ハ陸軍徽章アル者ト雖モ監獄長ノ達ニ非サレハ通行セシムルヲ得ス

第三十條 司獄官吏在監人ヲ管束スルハ一ニ和平ヲ秉リ罰令ニ照シ處分スルノ外恣ニ責罰スルヲ得ス

第三十一條 在監人書籍ヲ看ント請フ者アルトキハ内務書及操典若クハ

修身營業ニ必用ナル者ノミ之ヲ許スヘシ

第三十二條 未決者法庭ニ出ル時制服ヲ所持セル者ハ之ヲ着セシム但帶釧ヲ許サス

第三十三條 未決者及定役ニ服セサル已決囚ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢リ喫飯セシム又毎朝一日時間以内監房外ニ於テ運動セシム

第三十四條 定役ニ服スル者ハ毎朝日出ノ頃ニ起床シ各其監房ヲ掃除シ畢テ喫飯セシム其起床ヨリ約ネ一時間ヲ經テ役ニ就カシメ午前第十時前後ニ於テ湯若クハ水ヲ與ヘ正午十二時ニ至リ休役ス午飯後暫時休憩シ再ヒ就役日沒前役ヲ罷メシム其時間ハ別表コ之ヲ定ム但時宜ニヨリ其時間ヲ伸縮スルヲ得

起床還房及就役休役其他動止ヲ令スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第三十五條 囚徒ノ專習スヘキ工業ハ授業手若クハ工業殊等ノ囚ヲシテ之ヲ導カシム其刑期一年以下ノ者ニハ習熟シ易キ工業ヲ授クルヲ要ス

第三十六條 科程ヲ畢リタル者ハ時間ニ拘ハラス役ヲ罷メシム午飯ニ就

カシムルノ際科程ノ大半ヲ爲シ得タルヤ否ヤヲ驗視シ若シ怠役スル者ハ飯後ノ休憩ヲ許サス

第三十七條 工業勉勵シテ食費ヲ償フ可キ工錢ヲ得ル者ニハ其請ヒニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヲ得但一日金三錢ニ過クルヲ得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ヒニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルヲ得但一日金五錢ニ過クルヲ得ス

第三十八條 在監人各自ノ工錢ヲ以テ物品ノ需用ヲ願フ時ハ一週日毎ニ買辦支給スルモノトス

第三十九條 浴湯ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月ニ至ルマテハ三日毎ニ一次十月ヨリ五月ニ至ルマテハ七日毎ニ一次トス

第四十條 己決囚ノ髪ハ之ヲ短薙スヘシ

第四十一條 衣類雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ澣ヒ臭氣ヲ去リ蟲害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一ニシテ之ヲ曝洗ス可カラズ

第四十二條 燈火ハ監房外ニ置キ危險ノ虞ナカラシム

第四十三條 監房ニハ常ニ左ノ器具ヲ備ヘ置クヘシ

一貯水器 木製

一洗手盥 木製

一飲器 木製

一唾器 木製

一便器 木製 但監房ニ廁圍アルモノハ此器ヲ用ヒス

一藥箒

一雜巾

第四十四條 特赦ヲ受ケタル者アル時ハ免役日若クハ日曜日ノ午後ニ於テ他ノ囚徒ニ其旨ヲ告達シ仍ホ之ヲ揭示スヘシ

第四十五條 各監房内ニ左ノ諸款ヲ揭示シ傍訓釋義シテ解シ易カラシム可シ若シ文字ヲ知ラサル者アレハ入監ノ時ヨリ二十四時内ニ於テ之ヲ讀示スヘシ但未決監ニハ第二款第九款ヲ揭示セス

揭示

一在監人ハ常ニ教令ヲ謹守スヘシ

一平日互ニ和順ヲ主トシ教誨聽聞ノ席ニ就ク時ハ慎テ容止ヲ正フスヘシ

一每朝父母若クハ其墳墓所在ノ方位ニ向テ禮拜ス可シ

○第六類○治罪法○陸軍監獄署官員服務概則

- 一 每朝常用ノ諸器具ヲ清潔ニシ之ヲ排列シテ點檢ヲ受ケ及席壁廁  
圖等ヲ掃除スヘシ
- 一 空壁若シハ物件ヲ汚損シ唾壺外ニ唾シ貯水ヲ濫用スルヲ禁ス
- 一 監外ニ出タル時其途上ニ於テ同行ノ者ト交談シ及手ヲ交ヘ或ハ  
路人ニ聲語スルヲ禁ス
- 一 夜間ハ最モ鎮靜ヲ主トシ談話或ハ發聲或ハ濫リニ起歩スルヲ  
禁ス晝間ト雖モ放歌喧噪或ハ高聲ニ誦讀シ又ハ隣房ノ者ト談話  
スルヲ禁ス
- 一 許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ競ヒ或ハ賭博類似ノ  
惡戯ヲナシ或ハ同房ノ者ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカ如キ所  
爲アルヲ禁ス
- 一 服役中其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ及ヒ休憩ノ時間部外ノ工  
場ニ到ルヲ禁ス
- 一 許可ヲ得スシテ衣食其他ノ物件ヲ受與貸借スルヲ禁ス
- 一 總テ願向ハ官吏巡視ノ際申出ヘシ
- 一 監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ハラヌ直ニ看守所ニ通聲ス  
ヘシ

- 一 日没後ハ發病スルモ其症急劇ナルニ非サレハ翌朝ニ至テ醫療ヲ  
乞フ可キ者トス若シ劇症ナルトキハ直ニ看守所ニ通聲スヘシ
  - 一 獨居ノ者卒カニ病ヲ發シタル時ハ監房ヨリ看守所ニ架スル所ノ  
響器繩ヲ引キ以テ之ヲ報スヘシ
  - 一 病者アル時ハ同房ノ者共ニ介抱ニ力ヲ致ス可キハ勿論其看護人  
ヲラシムル者ハ切實ニ之ヲ看護スヘシ
  - 一 水火風震ノ際解放ニ遭フ者ハ其解放ノ時ヨリ二十四時内ニ監獄  
署或ハ憲兵部又ハ警察署ニ其旨ヲ首出スヘシ
- 右ノ諸款ニ違フ者アルヲ知テ告ケサル者ハ其情狀ヲ量リ處分ス可キ  
者ナリ
- 年號月日
- 某陸軍監獄署
- 第四十六條 滿刑歸隊歸郷ノ者ハ旅次証書ヲ付與ス可シ其証書ニハ某  
陸軍監獄署ト記シ署印ヲ捺ス可シ
  - 第四十七條 在監人醫官ノ診斷ヲ願フ時ハ看守長其姓名ヲ牒簿ニ記載シ  
醫官ニ申報スヘシ
  - 第四十八條 醫官ハ在監人一般ノ健康ヲ保全シ毎日囚徒就役時限前病者  
ヲ診察シ輕役休業監房入室等ヲ區分シ看守長ニ指示ス可シ

第四十九條 病者ノ攝養ニ効アル飲食物若クハ湯婆等ヲ用ユルヲ要スル時ハ醫官其旨ヲ證明シ監獄長之ヲ考檢シテ許否スヘシ

第五十條 傳染病侵襲ノ兆アル時其消毒豫防ヲ慎重ニス可シ若シ在監人中傳染病者アル時ハ直ニ病性及感染ノ形狀ヲ詳悉シ醫官ノ診斷書ヲ副ヘ所屬ノ長官ニ申報ス可シ

第五十一條 在監人死去スル時ハ監獄長醫官看守長會同驗屍ス可シ

驗屍畢レハ其狀況及月日時限ヲ記載シ醫官ノ診斷書ヲ副ヘ本人所屬ノ長官ニ申報ス可シ該隊不在ノモノハ監獄署ニ於テ陸軍墓地ヘ埋葬シ其費用ハ本隊ヨリ償還セシム若シ軍人軍屬ニ非サル者ハ本籍ノ戶長(戶長)及近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ

未決者又ハ已決囚ニシテ再ヒ訊問ニ係ル者ハ軍法會議ニモ亦之ヲ通知スヘシ

第五十二條 看護長ハ調劑及治療器械ノ磨拭等ヲナシ又患者ノ被服其他需用ノ物品ハ監獄長ニ請求シテ之ヲ受授セシム

第五十三條 看病卒ハ患者ヲ切實ニ看護シ又常ニ病室ヲ清潔ニ掃除スヘシ

用紙美濃紙

監獄長(檢印)未決者名籍	主檢	何等	書記	氏名印
隊號兵種本管	某管下國郡區村番地住族又ハ某子弟			
產地族籍氏名	何國郡區村產	隊號職名	官	氏名
年齡		某年	月	日生
職業及ヒ親屬	職業ヲ詳記ス可シ 父母兄弟及ヒ配偶者子孫ノ有無			
乳兒提携	男或ハ女 收監ノ時何年何ヶ月			
入蓋ノ年月日	明治何年月日午(前後)何時入監			
時罪件	何々ノ罪ヲ犯ス			
身材	長何尺何寸何分肥瘠強弱			
容貌 音聲	面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑瘰癧子癭癩黑痣癩風天皸創癩ノ類及ヒ音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス			
教育宗門	文字ヲ識ルヤ否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス何宗或ハ宗門不詳			

○第六類○治罪法○陸軍監獄署官員服務概則